

平成19年度 学力診断問題例と分析

各教科の学力診断テストの問題の中から、特に、回答率が低かった問題を取り上げ、更に分析したものです。これらの分析から、第一学年全体の学習意識の相関を捉え、生徒の実態を正確に把握し課題を導き出すとともに、授業改善に結びつけるための資料としたものです。

国語

三 次の文章を読み、各問いに答えなさい。

黒い丸い大きなものが、天井から落ちてずうっとしずんで、また上へ上つていきま
した。きらきらと黄金のぶちが光りました。

「かわせみだ。」

子供らのかには、首をすくめて言いました。

お父さんのかには、遠眼鏡のような両方の目をあらん限りのばして、よくよく見て
から言いました。

「そうじゃない。あれはやまなしだ。流れていくぞ。ついていつてみよう。ああ、
いいにおいだな。」

なるほど、そこらの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。
三びきは、ぼかぼか流れていくやまなしの後を追いました。

その横歩きと、底の黒い三つのかげ法師が、合わせて（ ）つ、おどるようにして、
やまなしの円いかげを追いました。

問もなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは
横になつて木の枝に引つかかつて泊まり、その上には、月光のにじがかもか集まり
ました。

宮沢賢治「やまなし」より

問一、 1は、何だったのか、文章中からぬき出しなさい。

問二、 2の表現には、子供らのかにのどのような気持が表われているか、適切
なものを次から一つ選びなさい。

ア、かわせみにあこがれる気持ち イ、かわせみをおそれる気持ち

ウ、かわせみを待ちこがれる気持ち エ、かわせみをあわれむ気持ち

問三、（ ）にあてはまる漢数字を書きなさい。

問四、かにの親子はどこにいるのか、次の中から選びなさい。

ア、月明かりに照らされた川岸 イ、青く光る波がよく見える海岸。

ウ、月明かりがそそこむ水の底 エ、青く光る星がよく見える山のかもと。

問五、 3は何を表しているのか、説明しなさい。

四 次の文章を読み、各問いに答えなさい。

いつもより早く学校に行くと、マコちゃんが、一人で窓のそばに立っていた。一人きりのマコちゃんを見るのはめずらしい。わたしが声をかけると、マコちゃんは（ ）うなずいて見せた。

こんなに元気がないマコちゃんを見たのは初めてだ。いやそれはわたしがマコちゃんを敬遠して¹たから、気がつかなかっただけなのかもしれない。もしかしたら、マコちゃんは、ときどきこんな顔²をしているときがあるのかもしれない。

わたしは、何か話しかけなくてはならないような気がした。でも、何を話していいのかわからない。

「あのさあ、わたし、メグちゃんからハムスターもらったのよ。」

マコちゃんの目が、ちよつと動いた。³

「ハムスターが。かわいいでしょうねえ。」

「マコちゃんも飼えば。」⁴

「わたしは、だめ。前に小鳥飼ったことあるけど、死なせちゃったから。」

なぜだかよくわからないけれど、わたしは、マコちゃんの力になりたいという気持ちになった。今のマコちゃんの力になってあげられるのは、わたししかない。そんな気がしていたのだ。

「わたしが飼う方教えてあげる。メグちゃんとか、子どもがたくさん生まれたから飼い主さがしてるの。いっしょにもらいに行こう。ね、そうしようよ。」

いつの間にかわたしは、背の高いマコちゃんのかたに手を回して、顔をのぞきこんでいた。⁵

那須正幹「マコちゃん」より

問一、（ ）にあてはまる言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。 [ア、明るく、イ、力強く、ウ、大きく、エ、小さく]

問二、¹の意味を次から一つ選び、記号で答えなさい。

[ア、さけるようにして イ、尊敬するようにして ウ、近づくようにして エ、遠くから見守って]

〈読角解について〉

学力診断では、二題出題。一つは小学校で学習した物語文、もう一つは初めて読む物語文で、600字～800字程度の非常に短い文章とした。また、その部分の内容が分かればはっきり答えられる設問のみを出題した。

できない理由として考えられるのは

- ① 文章を一人で落ち着いて読む力が付いていない。
- ② 従って、目に飛び込んでくる単語しか印象に残らない、理解できない。
- ③ 言葉一つ一つを大切に読んで読まないで、話の前後が理解できない。
- ④ さらに、言葉から情景を思い浮かべることができない。
- ⑤ 一文の中の言葉と言葉の関係が理解できていない。(修飾―被修飾など)が、挙げられる。

中学1年生の1学期は、文学作品(詩と物語)と説明的文章を扱い、それぞれの学び方を確認した。特に、③④の力を付けるため、語句の意味調べをこまめにさせたり、文章中のキーワードや段落の頭の語句に注目させたりした。1年間かけて、このような、ごく基本的な読解力の定着を図りたい。

定期考査Aでは、A評価が18%、C評価が38%の人数となっており、夏休み前の読書指導に力を入れた。

社会

学力テスト問題

- ② 2つのグラフを見て、各問いに答えなさい。 (問1～4「資料活用の技能・能力」
問5「社会的な思考・判断」)

問1、日本の貿易で輸出と輸入の総額では、どちらが多いか。

問2、輸出輸入の総額を合わせた貿易額が最も多い相手国の国名を答えなさい。

問3、日本の貿易の中心となっている地域を次から選びなさい。

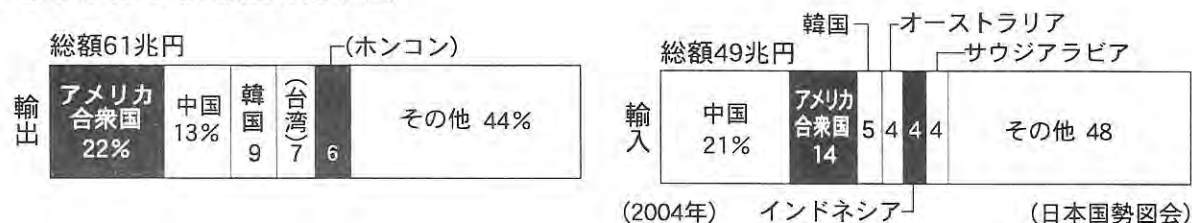
[ヨーロッパ アフリカ アジア]

問4、日本の輸出と輸入で最も金額が多いものを、それぞれ下から選びなさい。

[カメラ 鉄鋼 自動車 石油 肉類 衣類]

問5、これからの日本の貿易のあり方として大切なことは何か。次の語句を使って簡単に答えなさい。 [相手国 つりあい]

日本のおもな輸出入相手国



1、ノート指導をしっかり行うこと。

4月の学力診断テストの観点別達成率を見ると、「思考・判断」が68.5%、「技能・表現」が75.4%「知識・理解」87.3%であった。

この3観点では、「思考・判断」が低くなっているが、1学期は意欲を高め、ノートをしっかりとることに重きを置いた。提出されたノートの未達成率（板書をきちんと写せる率）は、5月終了時に15.2%だったが、6月末には6.8%に減った。

2、「思考・判断」を育成すること。

1学期は、「思考・判断」育成にも重きを置いた。統計や図表、年表や歴史資料から、まず事実を読みとり、次に多面的・多角的に考察していく。

4月の学力診断テストでは、②の問5の1問だけが記述式で自分の考えを述べる問題であった。6月の定期考査Aでは、先のような記述式の問題を5題に増やした。しかし、観点の「思考・判断」を問う問題全体の達成率は62.6%で、向上はしていない。今後とも力を入れていかななくてはならない。

3、地域素材を教材化していくこと。

6月3日の総合的な学習の時間で、地域の地域研究家 坂部氏に四谷周辺の歴史について語っていただいた。今後も、地理・歴史分野それぞれにおいて、地域素材を生かしながら、学習を活性化させたい。

数 学

学力テスト	学年末テスト																																						
① (3) $72 \div 8 \times 3$ (5) $32 + 54 + 3 + 68 + 46$ (6) $3 \times 7 + 2 \times 7 + 5 \times 7$ (7) $25 \times 11 \times 4$	① (12) $(-8) \div \frac{2}{3} \times (-3)$ ③ (3) ① $(-5) \times (-27) \times (-2)$ ② $125 \times (-4) + 125 \times (-5) + 125 \times (-11)$																																						
② (1) $6.5 + 8.1 - 4.3$ ③ (1) $\frac{2}{9} + \frac{5}{9}$ ③ (2) $\frac{7}{8} - \frac{1}{8}$ ④ (1) $\frac{2}{3} \times \frac{9}{10}$ (2) $\frac{3}{7} \div \frac{6}{7}$ (3) $\frac{3}{4} \times \frac{2}{9} \div \frac{1}{2}$	① (14) $(-\frac{2}{3}) \times (-\frac{4}{7}) - \frac{8}{21} \div \frac{2}{3}$ (16) $\{-\frac{4}{3} - (\frac{1}{7} - \frac{4}{5})\} - \{\frac{6}{7}(0.2 - \frac{2}{3})\}$																																						
⑩ 下の表は、A~E君の5人が1か月に図書館を利用した回数である。この5人が1か月に図書室を利用した平均の回数を求めなさい。 <table><tr><td>生徒</td><td>A</td><td>B</td><td>C</td><td>D</td><td>E</td></tr><tr><td>利用した回数</td><td>4</td><td>10</td><td>12</td><td>8</td><td>6</td></tr></table>	生徒	A	B	C	D	E	利用した回数	4	10	12	8	6	(4) 下の表は、A~Fの6人のテストの結果を、この中に1人の得点を基準にしてそれとの差で表したものです。次の問いに答えなさい。 <table><tr><td>A</td><td>B</td><td>C</td><td>D</td><td>E</td><td>F</td></tr><tr><td>-5</td><td>0</td><td>15</td><td>-20</td><td>5</td><td>-7</td></tr></table> ① 最高点と最低点の差は何点ですか ② Fの得点との差が最も大きいのはだれの得ですか (5) 下の表はある工場の製品の一週間の生産個数を、前日を基準として、多い時を正の数で表したものです。 <table><tr><td>曜日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr><tr><td>前日との差</td><td>0</td><td>10</td><td>-8</td><td>5</td><td>-12</td><td>30</td></tr></table> ① 生産個数をもっとも多い日ともっとも少ない日の個数の差は何個ですか ② 生産個数を、月曜日を基準として、それより多い個数を正の数で表すと、土曜日の生産個数はいくつになりますか (8) 7個の卵の重さをはかったところ、次ぎのようになりました。これらの卵の重さの平均を求めなさい。 57g, 55g, 53g, 58g, 56g, 59g, 54g (9) ある数に$\frac{8}{25}$をかけるのをまちがえて、ある数に$\frac{8}{25}$逆数をかけたため、積が$-\frac{9}{2}$になりました。正しい計算をした時の積はまちがえて計算をした時の積の何倍ですか	A	B	C	D	E	F	-5	0	15	-20	5	-7	曜日	月	火	水	木	金	土	前日との差	0	10	-8	5	-12	30
生徒	A	B	C	D	E																																		
利用した回数	4	10	12	8	6																																		
A	B	C	D	E	F																																		
-5	0	15	-20	5	-7																																		
曜日	月	火	水	木	金	土																																	
前日との差	0	10	-8	5	-12	30																																	

〈誤答理由 と 対策〉

① (3) (学力テスト) ① (学年末テスト)

誤答理由 乗法から先に計算してしまう。

対 策

- ・ 1 学期、正負の数の四則の学習で、計算の順序を確認する。
- ・ 先に計算するところにアンダーラインをひき、順序を意識することを指導する。
- ・ 除法を乗法になおし、一度に計算する方法を練習させる。

結 果 誤答率が減る。

① (5) (6) (7) (学力テスト)

誤答理由 工夫に気が付かないで答えを出す。工夫しても書き表し方が出来ない。

対 策

- ・ 正負の数で、交換、結合、分配法則を使えることを確認し、工夫のしかたを考えさせ、指導する。
- ・ 工夫すると速く正確に出来ることを実感させる。
- ・ 等号の意味を正しく理解して途中、式に表して説明することを理解させる。

結 果 工夫のしかたが分かるようになった。何回か書き方を指導することで、等号の意味を正しく理解できる生徒が増えた。また書き方の間違いが減った。

②、③、④ (学力テスト)

誤答理由 小数の計算の小数点の位置が、加、減、乗、除で正しく区別出来ていない。
分数の加法で、分母どうし、分子どうしたしてしまう。分数の意味を理解していない。

対 策 全体で小数、分数の復習をする余裕がないので、授業の個別指導、7 校時目の補習、夏休み中の補習で個別指導をする。

結 果 少しは、変化が見られたが、夏休み中の補充教室や、質問教室、今後の個別の対応が必要である。

⑩、⑰ (学力テスト)

誤答理由 文章の意味を読みとることが出来ない。読みとれても、計算ミスをしてしまう。何を答えたらいいのかが理解できず、正しい答えを書くことが出来ない。

対 策

- ・ 授業で文章の問題が出たときに、文章の意味、関係、何を求めている問題なのかをそのつどつかませるようにする。
- ・ 問題集をするときも、文章の意味、関係、求めているものを確認するように授業で説明しておいて、家庭で取り組ませる。

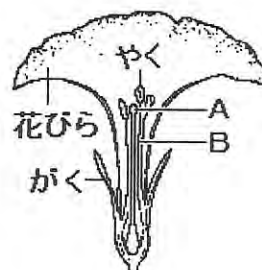
結 果 4 月のうちは、一つ一つ質問をしないと問題が解けない生徒が多かったが、自分で考えたり、例題をみたりしながら、自分で考えていく生徒が増えている。

今後も、プリント、問題集、等で、授業、7 校時、補習学習の時間を活用して基礎、基本発展の充実に努める必要がある。

理科

1 図1はアサガオの花を表したものです。問いに答えなさい。

- (1) 図1のAの名前を答えなさい。
- (2) Bの先にある袋(やく)の中に入っているものは何ですか。
- (3) やくの中に入っているものが、Aの先(柱頭)につくことを何と言いますか。答えなさい。
- (4) (3)がうまくいき、順調に成長すると、たね(種子)が中に入った実(果実)が出来ます。果実になるのはどの(図1)



部分ですか。ア～エより 1つ 選び記号で答えなさい。

ア、花びらの部分 イ、Bの部分 ウ、Aの部分 エ、がくの部分

- (5) 植物が太陽などの光の力を使って、デンプンを作るはたらきを何と言いますか。
- (6) (5)のはたらきでデンプンができたかどうかを調べるために使う薬品は何ですか。

学力診断では知識・理解の定着、科学的思考の確認、実験観察の技能・表現をそれぞれ確認する問題を出題した。各分野(物理・化学・生物・地学)ごとの学習状況を知るため、設問数7、問題数36と若干多めに出题した。

植物分野を例にとって、今回の学力診断を考察する。小学校の「植物」分野は、3年生から6年生まで、植物のつくりやはたらき、光合成まで学習する。

植物分野(問題1)では

- (1)(2)では、小学校5年生で行うおしべ・めしべなどの基礎学力(知識・理解)の定着を
- (3)(4)では、小学校5年生で行う受粉や受精後の仕組み(科学的思考)を
- (5)(6)では、小学校6年生で行う光合成の実験についての確認(技能表現)を確認する問題であった。6問の生徒率は56.7%であった。問題点として

1、基礎学力の定着について

- ・「めしべ・おしべ」という言葉は知っていても、場所が結びつかない。
- ・直接経験が少ない
- ・家庭学習の不足

2、科学的思考について

- ・なぜこうなるのか、という説明ができない。
- ・授業中、児童が受け身であり、説明を聞けない。

3、実験の取り組みについて

- ・光合成という言葉を理解していても、その意味を取り違えている児童が多い。

具体的には光合成は「葉緑体で、光のエネルギーを使って、二酸化炭素と水からでんぷんをつくること」である。「二酸化炭素から酸素をつくること」と理解している生徒もいた。

- ・予想をたてる、実験を行う、実験結果から考える(考察する)、という一連の流れが身についていない。

中学校1年1学期に「植物」分野を学習した。上記を受けて以下のように取り組んだ。

ア、基礎学力の定着

- ・小テストを実施し、合格点(6割)を取れない者は、補習授業・再テストを行った。
- ・再テスト受験者の合格達成率はほぼ100%であった。
- ・また定期考査Aでは、成果が現れている生徒も多かった。

イ、科学的思考

- ・授業中に必ず「思考」の時間を与えた。当初、ほとんど書くことができなかった生徒も少しずつ書くことができるようになってきた。
- ・実験・観察での取り組み(後述)

ウ、実験・観察

- ・「実験の目的」→「予想を立てる」→「実験を行う」→「考察する」→「まとめ」という一連の流れで行い、探究させること、思考させることも行った。
- ・なるべく本物にふれさせる。触れられる物はなるべく触れさせるように工夫し、触れられない物もパソコン等を用いた。

エ、定期考査Aでは、上記ア～ウの成果がまだまだ出ているとは言い難いので、今後
も継続して指導していく。

☆☆

【本部会の成果と課題】

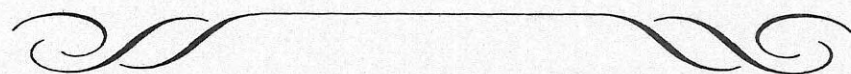
18年度の研究を通して、地域に住む各種専門家による授業の体験は、学習活動に広がり
と深まりを与え、そのことは生徒個々の学習や成長の契機となることが明らかになった。
その点を踏まえ、19年度は、地域の人材活用・地域の教材化をより計画的・効果的に進
める上で、学力を中心とした生徒の実態を的確に把握し、学力向上のためのよりよい指導
法のあり方を検証した。年間計画に沿って分析を重ねた結果、現段階で次の四点を共有す
ることができた。

- ①上位層・中位層・下位層に応じた課題が把握出来たこと。
- ②家庭学習の充実のための宿題の出し方を工夫すること。
- ③筋道を立てて考えさせること。
- ④失敗を怖れずチャレンジさせること。

次に、本校は、独自の取り組みとして7校時(30分間)の時間を設定している。この
ことは、昨年度の取り組みから、無理のない最小単位の学習時間の設定の必要性和、学習
効果の相関から検証せれたものとして設定された。

第一学年では、漢字や英単語の書き取り、計算練習など、20分程度で終わる内容で実
施し、基礎・基本の定着を図っている。さらに、自主学習へのサポートとしては、単に学
習事項を板書するだけではなく、自分の考えを盛り込むノートの取り方なども継続して指
導をすすめている。

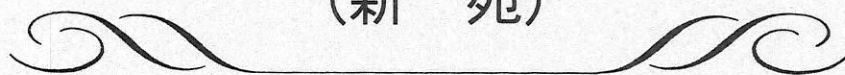
上記の成果を、地域との協働という視点から考察すると、個々の生徒の課題解決のため
には、学校は指導方法の工夫改善をさらなる推進を、保護者は家庭学習の充実を、地域は
専門性のある地域人材の提供を、それぞれが責任ある取り組みを進めることが重要と考え
る。今後は、学校と保護者・地域が生徒を育てることの責任を共有し、生徒のよさをさら
にひきだしていくための学習計画の確認、助言等のやりとりを積極的に進め、自ら学ぶ生
徒の育成へと協働を構築していきたい。



VII. 四谷学研究開発・実践部会

(2 年)

(新 苑)



「Back to the Future 鎌倉」の学習について

1. 学習の流れ

- ①各クラスで6教科の学習内容を見て、担当教科と係を決定する。
- ②各教科に分かれて、担当教科の先生より説明を受ける。
- ③テーマにそって、調べ学習・体験学習を行う。
- ④中間報告会をする。
- ⑤学習の進み具合を壁新聞で知らせる。→知識・体験を共有する。
- ⑥学習成果をまとめる。
- ⑦学習成果を発表する。
- ⑧鎌倉遠足を通して体験学習をする。
- ⑨体験学習を通しての総まとめをする。

2. 各教科の学習内容・実施場所

教科	内 容
国語 2-A	鎌倉の文学・言葉 【集まったメンバーと相談し、細かいテーマを設定する】
数学 2-B	鎌倉と今 【数学的にみた違いを調べる】
理科 第二理科室	鎌倉の地形 【地図を見て、地形がつくってきた歴史を類推する】
音楽 音楽室	能楽「安宅」より【一部を実演する】
技家 被服室	鎌倉時代の衣食住・生活用品 【実際に食事を再現したり、衣服や生活用品について調べたりする】
英語 2-C	鎌倉ガイド英語版をつくる 当日【外国人観光客の方々に説明出来るようにする】

3. 係分担

係	仕 事 内 容	氏 名
班 長	学習活動の計画と実施の中心	
副班長	班長の補佐	
記 録	どのように学習を進めたかの記録	
調 達	備品を借りる、道具・教材の準備の中心	
広 報	学習活動の宣伝、発表、ポスター・パンフの作成の中心	
会 計	費用の計算や決算の係	

第二学年「Back to The Future 鎌倉」～鎌倉の時代背景と文化～

1 目標

第二学年では、第一学年での「江戸時代」の学習を基礎として、時代を遡り「鎌倉時代」について6つの教科（国語・数学・理科・音楽・技術家庭科・英語）に分かれて調べ学習を行うこととした。その調べ学習を始めるにあたっての基礎知識として、鎌倉時代の武士の気質やその時代の考え方等を歌や文章、芸能を例に取り話していただき、鎌倉の時代背景をその時代に実際に生きた人々を通して把握させ、各自の学習課題を明確にすることを目指す。

2 指導計画

①鎌倉の学習のガイダンス	1時間
②各教科に分かれての調べ学習・体験学習 （国語・数学・理科・音楽・技家・英語）	2時間～ ……本時 15時間
③発表会	2時間
④鎌倉の見学コース決定・計画等	4時間
⑤鎌倉体験学習	6時間
⑥まとめ	2時間

3 本時の目標

- ・鎌倉時代の和歌や文学作品や能の作品の特徴や作者についての基礎的な知識を得る。
- ・歌や文章、能の作品を通して、鎌倉時代の武士の気質や人々の考え方に気づかせる。

4 日時・生徒数

7月5日（火曜日） 5. 6校時 2学年生徒110名 教員7名

5 講師 金井 利浩氏

6 場所 図書室

7 本時の流れ

時間	指導内容	☆指導上の留意点 ◇評価規準
5分	・ 講師の紹介 ・ 本時の学習内容との確認 ・ 注意事項を確認	☆プリントを配布する。 ☆講師の紹介と説明の聞き方、プリントの記入の仕方を確認させる。
50分	・ 鎌倉以前の文学と鎌倉時代の文学の違い ・ 文章の中に見る武士の気質 ・ 武士と和歌 ・ 能と言葉 について、話していただく。	☆話を聞きながらポイントをまとめてプリントにメモするよう指示する。 ☆記録を取りながら、しっかり話を聞いているかを観察する。 ◇記録を取りながら、しっかり話を聞いているか。 A 記録をしっかり取り、集中して聞いている。 B 記録を取り、聞いている。 C 記録が不十分である。
15分	・ 質疑応答 ・ 代表者がお礼の言葉を言う。	☆代表生徒を司会として立て、質疑応答が円滑に行えるようにする。

・まとめと自己評価をする。

☆各教室で、プリントのまとめと自己評価をさせる。

◇プリントの記入をきちんと行い、自の考えをまとめ述べているか。

A : どの項目もきちんとまとめ、自分の考えもはっきり示している。

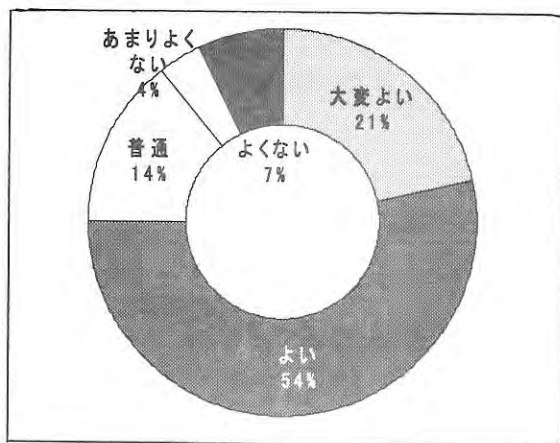
B : ほほまとめられており、自分の考えもまとめている。

C : まとめられていない項目があり、考えもまとまっていない。

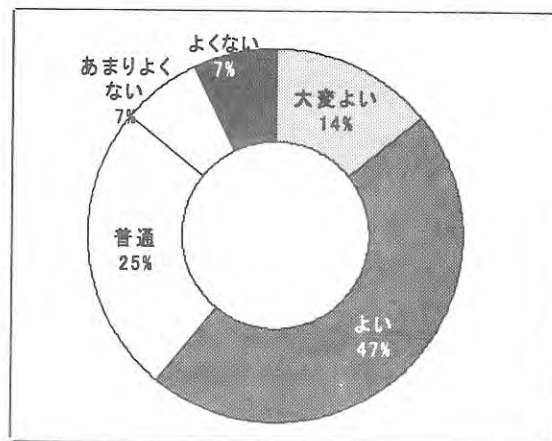
「Back to The Future 鎌倉」～鎌倉の時代背景と文化～のまとめ

1. 自己評価から

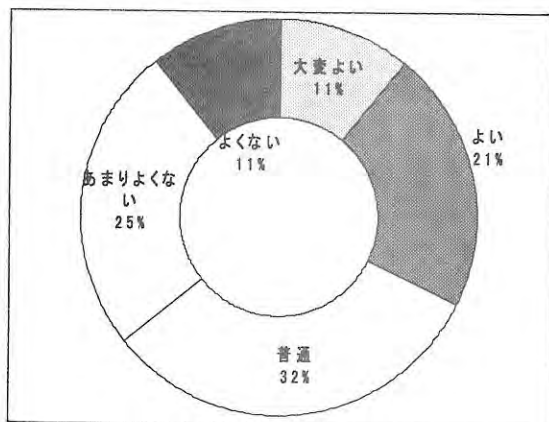
①お話をよく聞けましたか？



②礼儀正しい態度で臨めましたか？



③ポイントを聞きメモできましたか？



金井氏の講演の様子



2. 紹介された武士の気質について気付いたことベスト5は？

- | | |
|----------------------------|-----|
| ①無言で動ける信頼関係 | 23名 |
| ②恩を大切にし、受けた恩は必ず返す口約束も必ず守る。 | 18名 |
| ③なすべきことをなす心構え | 10名 |
| ④出来て当たり前 | 7名 |
| ⑤武士は勇気があり冷静 | 5名 |

その他 礼儀正しい・武士はすごい・プライドが高い・きっぱりした人達・男らしい・
武士は大変だった・何事もなかったように振る舞い自慢しない・傲慢で強い人・
志がある・いつ命を落としても後悔しないように生きている・よく分からない等

3. お話の中で特に印象に残ったことベスト5は？

- | | |
|----------------------|-----|
| ①源頼信、源頼義親子の無言で分かり合う話 | 33名 |
| ②父と子の再会の場面 | 21名 |
| ③藤原定家と和歌集の話 | 10名 |
| ④源実朝と和歌の話 | 9名 |
| ⑤恩を返した和田義盛の話 | 6名 |

その他 義を重んじる・八幡宮の雪の場面・阿鼻地獄・情動・八という数字・頼朝・
古今和歌集・正しいと思ったことをみんなしている・敵味方なくよい者は認める姿勢 等

4. 感想・反省

「教科書に載っていない鎌倉の歴史が分かった。」

「少し聞いていないところもあったけれど、話しが分かりやすくてよかった。」

「金井さんからいろいろなお話が聞けて、とても光栄でした。」

「鎌倉武士の生き方について分かったので、もっと勉強したい。」

「金井さんは、あんなに喋れてすごいと思った。聞き取りやすく、分かりやすかった。」

「色々と勉強になった。実朝についてもっと知りたくなった。」



第二学年「Back to The Future 鎌倉」～鉄器の文化と伝統の技を知る～

1. 目標

第二学年では、第一学年での「江戸時代」の学習を基礎として、時代を遡り「鎌倉時代」の調べ学習を通して、気付いたこと、学んだこと、疑問に思ったこと等を踏まえて、実際に古くからの日本の伝統技術を受け継いでいる方のお話を伺い、時代は移っても大切な物や技術、心は受け継がれていることに気付かせると共に、自分の生き方を考えさせる。

2. 指導計画

①鎌倉の学習のガイダンス	1 時間
②各教科に分かれての調べ学習・体験学習 (国語・数学・理科・音楽・技家・英語)	2 時間 ～ ………本時 1 5 時間
③発表会	2 時間
④鎌倉の見学コース決定・計画	4 時間
⑤鎌倉体験学習	6 時間
⑥まとめ	2 時間

3. 本時の目標

- ・刀鍛冶の方のお話を通して、今に受け継がれている技術と心を知る。
- ・鎌倉時代の鉄器と刀の発達を知り、その技術の伝承の難しさと意義を考える。

4. 日時・生徒数

7 月 5 日 (火曜日) 5. 6 校時 2 学年生徒 1 1 0 名 教員 7 名

5. 講師 佐藤 利美氏

6. 場所 図書室

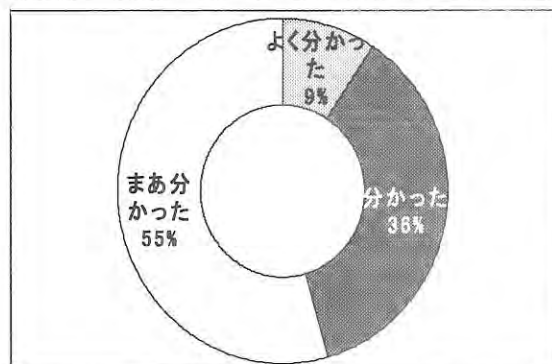
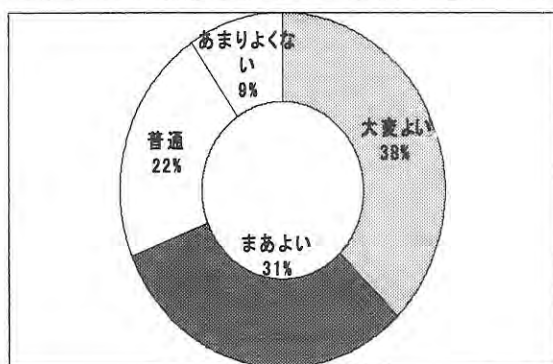
7. 本時の流れ

時間	指導内容	☆指導上の留意点 ◇評価規準
5 分	・ 講師の紹介 ・ 本時の学習内容との確認 ・ 注意事項を確認	☆プリントを配布する。 ☆講師の紹介と説明の聞き方、プリントの記入の仕方を確認させる。
7 0 分	・ 講師の方からなぜ鍛冶の仕事を行うようになったのかを聞く。 ・ よい物と悪い物の違いに気付き、よい物を作ることの喜びと苦勞を知る。 ・ 鎌倉時代の鉄器と刀の発達と鍛冶の仕事を知る。 ・ 昔の鉄器を知り、今も使われていることを実物を見て確認するとともに、現代によみがえった大刀作りの技術のすばらしさを知る。	☆なぜ鍛冶の仕事を行うようになったのかの話をメモすることを通して、よい物と悪い物の違いや作る喜びや苦勞に気付かせる (プリントの工夫) ☆記録を取りながら、しっかり話を聞いているかを観察する。 ☆鎌倉時代の鉄器と刀の発達を以前と比較して気付かせる。 (プリントの工夫) ☆伝統の技と現代によみがえらせた技のすばらしさに気付かせる。 (プリントの工夫) ◇記録を取りながら、しっかり話を聞いているか。

	・手加減の大切さと技術の伝承の難しさ おもしろさ、伝えていくことの意義を知る。	A 記録をしっかり取り、集中して聞いている。 B 記録を取り、聞いている。 C 記録が不十分である。 ☆手加減の大切さと伝統を次世代に伝えていくことの意義をうかがい、それについての各自の意見をまとめさせる。
15分	・感想を発表する。 ・まとめと自己評価をする。 ・代表者がお礼の言葉を言う。	☆本時を振り返らせ、感想を発表させる。 ☆プリントのまとめと自己評価をさせる。 ◇プリントの記入をきちんと行い、自の考えをまとめ述べているか。 A : どの項目もきちんとまとめ、自分の考えもはっきり示している。 B : ほぼまとめられており、自分の考えもまとめている... C : まとめられていない項目があり、考えもまとっていない。

「Back to The Future 鎌倉」～鉄器の文化と伝統の技を知る～のまとめ

1. ポイントを聞き取りメモ出来ましたか？ 2. 手加減の意味とその大切さが分かりましたか？



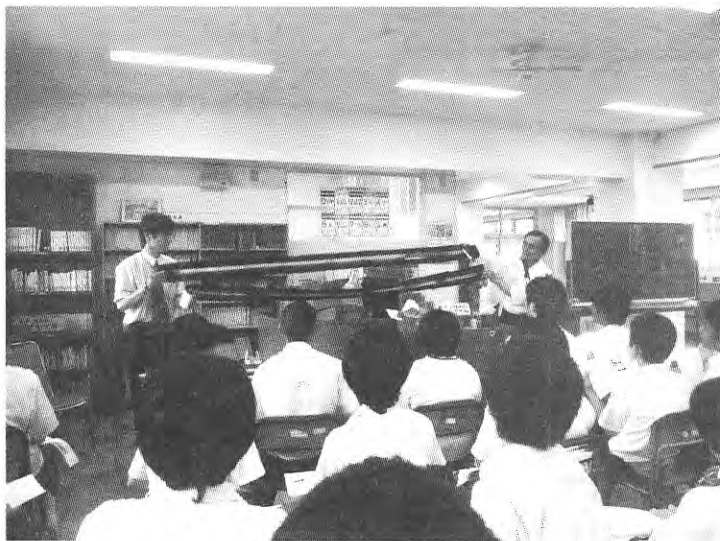
3. 佐藤さんのお話で一番印象に残ったものは？

- 1 番 鉄と鋼と隕鉄について
- 2 番 ものを作るのは、頭で考えるのではないということ
- 3 番 刀は今の時代にはいらぬものである。
- 4 番 伝統を受け継ぐということ
- 5 番 江戸時代の刀と鎌倉時代の刀の違い
- 6 番 タタール人と鉄
- 7 番 加減の大切さ
- 8 番 刀鍛冶の修行を40歳から始められたということ
- 9 番 武器は、自分を守るもの
- 10 番 道具は、武器にもなる

槍鉋の実演中の佐藤さん



佐藤さんは鍛冶の衣装で講演して
くださいました



2 mの刀の写真を見せてくださる
佐藤さんと息子さん

鉄鉱石の見本を見る生徒



槍鉋の説明をする佐藤さん



第二学年「Back to The Future 鎌倉」家庭分野

～鎌倉の衣食住を体感する～

1. 目標

第二学年では、第一学年での「江戸時代」の学習を基礎として、時代を遡り「鎌倉時代」の衣食住を調べ、実際に食事を再現したり、衣服を着用してみたり等鎌倉時代に生きた人々の生活を振り返る。

その体験を通して、その当時の生活の知恵や生き方が今に受け継がれていることに気付かせると共に、今の自分たちの生活と比較しこれからの自分たちの生活に生かし、より良くしていこうとする姿勢を養う。

2. 指導計画

①鎌倉の学習のガイダンス	1 時間	
②各教科に分かれての調べ学習・体験学習 (国語・数学・理科・音楽・技家・英語)	1 5 時間 ………本時	
③中間発表会	2 時間	
④発表会	1 時間	
⑤鎌倉の見学コース決定・計画等	3 時間	
⑥鎌倉体験学習	6 時間	
⑦まとめ	2 時間	計 3 0 時間

3. 本時の目標

- ・武士の鎧甲を実際に着用し、動いてみる等体験を通して、調べた事柄の確認とその時代に生きた人々と今の自分たちとの生活の違いを感じ取る。
- ・講師の方のお話しを通して、昨年度学習した「江戸時代」と「鎌倉時代」の違いを知る。

4. 日時・生徒数

7月3日(火曜日) 5. 6校時 2年A組6名 2年B組6名 2年C組6名 計18名

5. 講師 泉 毅氏・岩崎 紀雄氏(鉄砲組百人隊保存会)・野口 はるね氏(2学年保護者)

6. 場所 体育館

7. 本時の流れ

時間	指導内容	☆指導上の留意点 ◇評価規準
5 分	・講師の紹介 ・本時の学習内容の確認 ・注意事項を確認	☆プリントを配布する。 ☆講師の紹介と説明の聞き方、プリントの記入の仕方と安全面の注意を行う。
7 0 分	・講師の方から江戸時代と鎌倉時代の鎧甲の違いを聞く。 ・伝統を次世代に伝えていくことの意義を聞く。 ・自分の担当を確認し、班ごとに鎧甲の着用をする。 ・着付けの順番・用途・名称等をメモ	☆講師の方の説明のポイントを把握しメモを取るように指示する。 ☆伝統を次世代に伝え残すことの意義をうかがい、それについての各自の意見をまとめさせる。 ☆鎧甲を着用する代表者の周りに集合させ各自の仕事分担を確認させる。 ☆大切な点をメモを取りながら見たり、写真

	しながら着用の様子を観察する。 ・動作をしたときの様子の観察や着用者の感想等を各班ごとにまとめる。 ・片付けを行う。	で記録したりするように指示する。 ☆諸注意を守り、安全に留意して各班作業させる。 ◇ポイントを押さえて、体験しているか。 A：どのポイントもしっかり押さえて手際よく作業している。 B：ほぼポイントを押さえて作業している。 C：ポイントが分からず作業が悪い。 ☆着用後、実際に動いてみた感想等を各班でまとめさせる。 ☆協力して安全な片付けを心がけさせ、各班の始末の状態をチェックする。
15分	・感想を発表する。 ・まとめと自己評価をする。 ・代表者がお礼の言葉言う。	☆本日の体験を振り返らせ、感想を発表させる。 ☆プリントにまとめと自己評価をさせる。 ◇プリントのまとめがきちんと出来ている。 A：どの項目もきちんとまとめられている。 B：ほぼまとめられている。 C：まとめられていない項目がある。

第二学年「Back to The Future 鎌倉」家庭分野のまとめ **～鎌倉の衣食住を体感する～**

1. 体験を通して

- 「江戸時代と鎌倉時代では、鎧甲も強度がちがうことが分かった。」
- 「鎌倉時代は、弓矢だが蒙古襲来や鉄砲の伝来により鎧甲も頑丈になったのが分かった。」
- 「着付けを手伝ったが、着せるのに手順があることが分かった。」
- 「一つ一つの物が見慣れない物で興味深かった。」
- 「着ると重くて、手をあげるのも大変だった。」
- 「着ると暑くて、汗だくになりましたが、貴重な体験をさせてもらったと思います。」
- 「鎧甲を着て走るのは大変そうでした。昔の人は、大変だったと思います。」
- 「鎌倉と江戸の鎧甲は、見た目がちがうと思いました。鎌倉の方がきれいでした。」
- 「貴重な体験をさせてもらったと思います。槍を甲冑を着てふるのは大変でした。」
- 「着付けを見ていて、大変そうだと思います。」
- 「重そうでした。昔の人は我慢強かったと思います。」
- 「説明が分かりやすく、江戸と鎌倉の違いがよく分かりました。」
- 「見ていて楽しかったです。大変そうでしたが自分も着てみてもよかったと思いました。」
- 「体験できてよかったです。見てみないと分からないと思いました。」

2. 鎧甲を体験して



着付けをしてくださる野口さんと
ふれあいサポーターさん



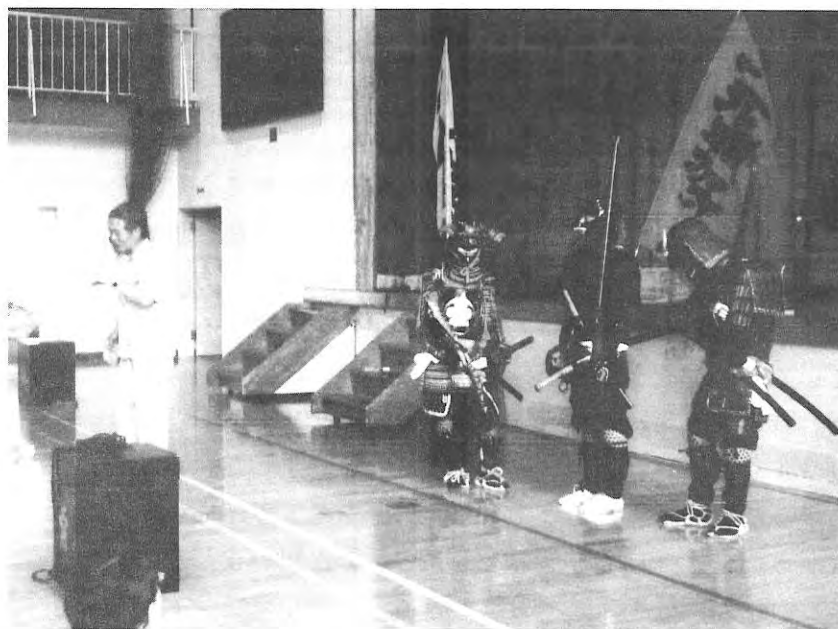
着付けをしてくださる岩崎さん



着付けをしてくださる泉さん



鎧甲を着用して走ってみました



鎌倉時代と江戸時代の鎧甲の違いを説明してくださる泉さん

「食育」第二学年 ～祭りずしを習う～(略案)

1. 目標

第二学年では、第一学年での「自分で朝食をつくろう」を基礎として、「家族のために夕食をつくろう」をスローガンとして取り組むこととした。

食事が楽しいと感じるのは、一人で食べているときではなく誰かと楽しく会話しながら食事をしているときである。中学生は、部活動や塾、習い事等で毎日、忙しい日々を過ごしている。また、両親共に働いているケースも多く、夕食をいつも決まった時間に家族と食べる生徒も少ないのが現状である。そこで、家族との楽しい夕食を生徒自らが献立を考えつくることで、家族の中の自分の役割や出来ることを考えさせるとともに、家族との絆を深めさせることを目指し、第二学年の「食育」の授業を総合の時間で進めることとした。

2. 指導計画

①行事食と伝統食について	1 時間
②伝統食のすし（祭りずし）の調理実習	2 時間……………本時
③三國シェフによる「食の大切さ」の講演会	2 時間
④テーブルセッティング	2 時間
⑤すしを取り入れた家族のための献立づくり	2 時間
⑥調理実習「家族のための夕食づくり」	2 時間
⑦まとめ	1 時間

3. 本時の目標

- ・伝統食の一つである「巻きすし」の調理技術を身に付ける。
- ・食材の調理上の性質と扱いの注意点を理解する。
- ・安全な調理と片付けができる。
- ・飾り付けの仕方と食事のマナーを身につける。

4. 日時・生徒数

6 月 8 日（金曜日）

1、2 校時 2 年 A 組 3 8 名 3、4 校時 2 年 B 組 3 6 名 5、6 校時 2 年 C 組 3 6 名
計 1 1 0 名

5. 講師・担当教員

千葉県伝統郷土料理研究会	杉崎 幸子先生	
"	石橋 京子先生	
"	市川市立南行徳小学校栄養士	大河原 悦子先生
"	市川市立柏井小学校栄養士	山口 由紀子先生
"	市川市立大柏小学校栄養士	谷地 智恵先生
第二学年教員（伊藤え・飯塚・伊藤の・岡村・松友・峯尾）		
本校栄養士（日高） 元本校栄養士、現落合中栄養士（塩塚）		敬称省略

6. 地域・保護者参加者一覧

- | | | |
|---------|----------------------|------|
| 1. 2 校時 | 小林・柴木・久保・小西・竹田・酒井・田畑 | |
| 2. 4 校時 | 木村・片桐・坂本・矢崎・遠藤・小倉 | |
| 3. 6 校時 | 野口・村井・伊川・高野・中島・神子島 | 敬称省略 |

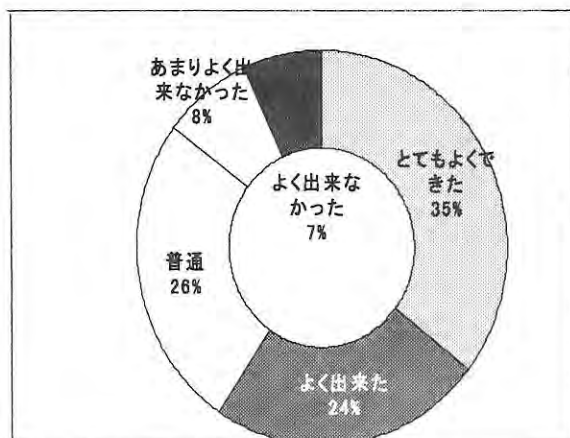
7. 本時の流れ

時間	指導内容	☆指導上の留意点 ◇評価規準
5分	・ 講師の紹介 ・ 本時の学習内容の確認 ・ 注意事項を確認	☆プリントを配布する。 ☆講師の紹介と説明の聞き方、プリントの記入の仕方と安全面の注意を行う。
70分	・ 祭りずし（2種類）の手本の実演を見る。 ・ 祭りずし【基本の花】の実習を行う。 ・ 飾り付けを行う。 ・ 試食をする ・ 片付けを行う。	☆実演する教卓の周りに集合させ、大切な点をメモを取りながら見るように指示する。 ☆諸注意を守り、安全に留意して各自実習させる。 ◇ポイントを押さえて、実習しているか？ A：どのポイントもしっかり押さえて手際よく実習している。 B：ほぼポイントを押さえて実習している。 C：ポイントが分からず手際が悪い。 ☆配膳やマナーに気を付けて試食させる。 ☆協力して安全な作業を心がけさせ、各班の始末の状態をチェックする。
15分	・ まとめと自己評価をする。	☆プリントにまとめと自己評価をさせる ◇プリントのまとめはきちんと出来ているか A：どの項目もきちんとまとめられている。 B：ほぼまとめられている。 C：まとめられていない項目がある。

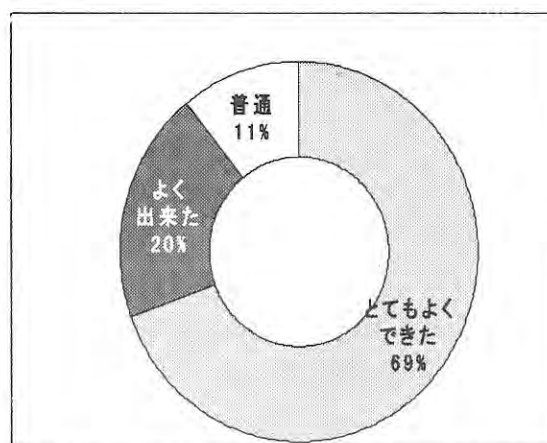
「食育」第二学年 ～祭りずしを習う～のまとめ

1. 生徒の自己評価より

①説明をしっかりと聞き、メモ出来ましたか？

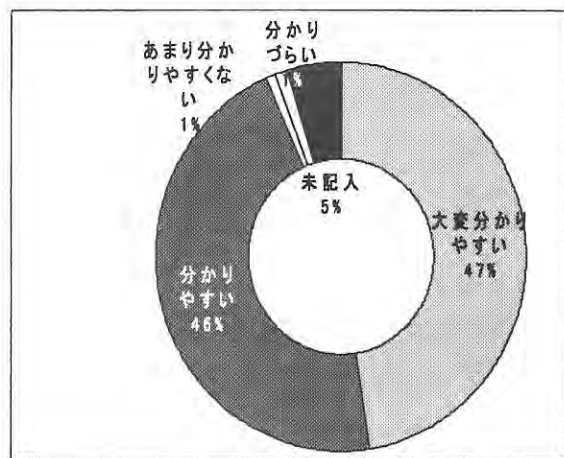
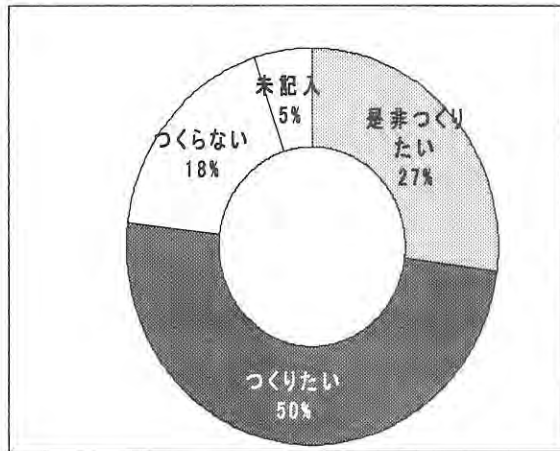


②安全に気を付けて作業出来ましたか？



③家でつくってみようと思いますか？

④講師の方々の教え方は分かりやすかったですか？



2. 感想・反省

- ・ 今度いろいろな種類のものにも挑戦してみようと思った。家でも機会があればやってみたい。
- ・ あじさいの実演がよかった。とてもやりがいがあった。
- ・ いい体験だった。楽しかった。 ・ 最初は大変だったが、楽しかった。
- ・ 大変だったが、よい体験ができてよかった。 ・ 色々体験できてよかった。
- ・ 実際に作り方を見せてもらってよかった。よい体験ができたよかった。
- ・ 綺麗な巻き方分かってよかった。のりを足さなくてはいけなくなったが最後は綺麗に出来た。
- ・ 講師の方と一緒に祭りずしを作れてよかった。とてもよい経験だった。家でも作ってみたい。
- ・ 分かりやすく教えて下さりよかった。胡瓜に味があるとよかった。
- ・ 初めての海苔巻きだったので難しかった。 ・ 美味しかった。また、家で作ってみたい。
- ・ うまく出来てよかった。疲れた。家でもつくってみたい。
- ・ 思ったより美味しかった。もっといろいろな種類のすしを作ってみたくなった。
- ・ 祭りずしの巻き方がよく分かった。とても楽しく出来た。またやってみたい。
- ・ 作り方を全部覚えて作ればよかったと思う。思ったより上手く切れました。
- ・ とにかく何とか作ることが出来てよかったです。
- ・ 早く出来てよかった。とても面白かった。是非、また作ってみたい。
- ・ 日本の文化を学ぶことが出来てよかった。楽しかった。
- ・ よい体験ができた。頑張るほど綺麗に作れることが分かった。
- ・ 祭りずしや関東・関西の違いが分かりよかった。 ・ 山作りが大変だったが、頑張った。
- ・ 巻くのが難しかったが、結構うまく巻けた。 ・ なんかとても面白かったです。
- ・ 巻くのは大変だったけれど、切ってちゃんと形になった時は嬉しかった。
- ・ なかなか体験できないことなので、体験でき嬉しかったです。美味しかった。
- ・ 大変だったけれど上手に出来た。とても勉強になりました。
- ・ 綺麗に出来てよかったです。とても勉強になりました。
- ・ 太巻きが思ったより太くてビックリしました。初めて作って色々なことが学べてよかった。
- ・ 美味しく出来てよかった。また、家で作りたと思いました。
- ・ 形作るのが大変だった。自分で作ったものは、美味しいと思った。
- ・ 茎を作るのが大変でした。また今度作ってみたいです。

- ・初めて祭りずしを作って、大変だったけれど楽しくつくれてよかった。
- ・しっかり巻いて、見た目も気にするのは大変だったけれど楽しかった。
- ・家ではあまり巻きずしは食べないので、今度家族のために作ってみようと思った。
- ・初めてだったけれど楽しく作れてよかった。
- ・今回は先生に手伝ってもらったので、今度は自分一人で作りたいと思います。
- ・巻くのが難しかったけれど頑張りました。

3. 作業の様子



講師の方の実演



見本の祭りずし（あじさい・カタツムリ・バラ）



祭りずし（基本の花）の説明



祭りずし（基本の花）の実習



祭りずし（基本の花）の実習



保護者の方々も一緒に実習

ちばけん でんとうきょうどりょうり ふと き まつ
千葉県の伝統郷土料理 《太巻き祭りずし》

わたし す ちばけん ふる つた う つ ぎ くち はな ちょうちよう
私たちが住んでいる千葉県に古くから伝え受け継がれている巻きずしです。切り口から、お花や蝶々、
もし もんよう きよう はな つく
文字など、いろいろな文様があらわれます。今日はかわいい『基本の花』を作しましょう。

基本の花の作り方



【材料 1本分】

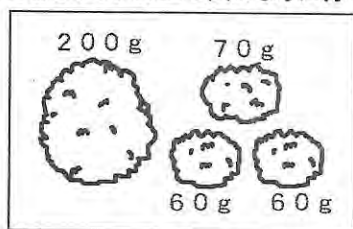
すしめし 白……………400g
海苔 全形 ……… 2枚

ウインナー ……… 1.5本
きゅうり (18 cm) ……… 1本
※板ずりして、たて半分に切る

【作り方】

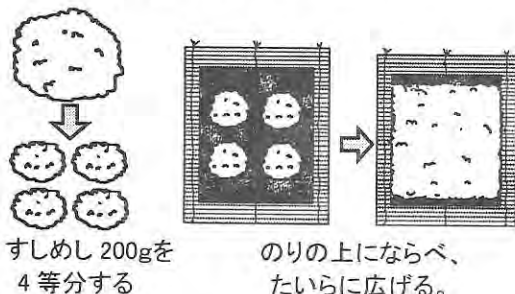
① ごはん 400gを計る

すしめしをラップの上で図のように分ける

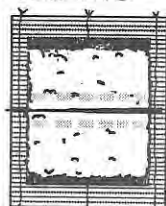


② 海苔の上にすしめしを広げる

まきすに全形ののりをおき、上下 1.5 cmのこし、
白すしめし 200gを平均に広げる。

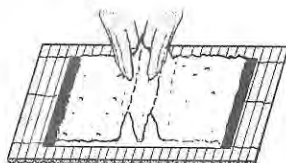


③ 山をつくる

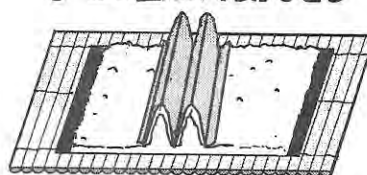


中央に菜ばしをおいて
目印にし、菜ばしの奥と
手前に2本の「山」を
つくる (山のすめしは
1本 60gくらい)

巻きすの向きを縦にして
山の両側を指先で
はさむようにして、形を
ととのえる

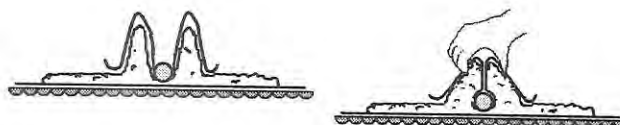


④ 山の上のにりをかぶせる

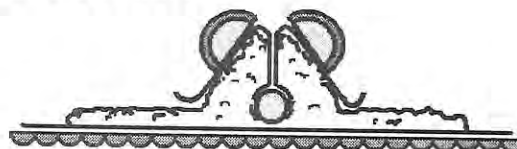


谷はしっかり
おさえる

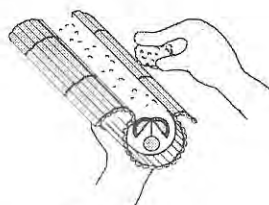
⑤ ウインナーをおき、山と山をよせる



⑥ きゅうりをおく



⑦ 巻きあげる



巻きすごと縦に
持ちかえ、残りの
すしめしをかぶせ、
巻き上げる



両はじを整えて、
7個に切る。

【参考文献】

〈楽しく作る祭りずし/祭りずし・郷土ずし〉く子どもとつくる 太巻き祭りずし 龍崎英子著: 全国学校給食協会出版
〈太巻き祭りずし作り方教室〉龍崎英子著: 東京書店株出版
〈和英対訳くあ〜と太巻き祭りずし〉龍崎英子著: 日本教育新聞社出版
〈子どもといっしょに 太巻き祭りずし〉龍崎英子著: 全国学校給食協会出版

「食育」～食の大切さを三國シェフに伺う～の実施要項

1. 目標

健康な体と心を育てるために、安全で栄養バランスの良い食事を3食きちんと食べること、味覚を育てること、食事を楽しむことの大切さを三國シェフの生き方とともに話していただき、食べることの意味と大切さに気付かせ、自分の食生活を振り返り改善しようとする姿勢を養う。

2. 指導計画 (12時間)

*は、講師を招いての授業

第1学年	第2学年	第3学年	時間
中学生の食事	行事食と伝統食について	食事と病気の関係	1
*だしの取り方の実習	*伝統食のすし(祭りずし)の調理実習	安全・安心な食材選び	2
三國シェフによる「食の大切さ」の講演会			2時間……本時
*ファーストフーズと健康	*テーブルセッティング	*煮物の基礎の実習	2
朝食の献立づくり	すしを取り入れた家族のための献立づくり	煮物を取り入れたお弁当献立づくり	2
調理実習「朝食づくり」	調理実習「家族のための夕食づくり」	調理実習「お弁当づくり」	2
まとめ			1時間

3. 日時 平成19年7月9日(月) 午後1:10～3:30

4. 場所 四谷中学校体育館

5. 講師 オテル・ドゥ・ミクニのオーナー・シェフ 三國 清三氏

6. 内容 「食の大切さ」「三國シェフの生き方」

7. 担当 ①総合の時間責任者 副校長 山本 宣子

教務主任 伊藤 憲弘

②総合の時間「食育」担当者 技術・家庭科家庭分野担当 伊藤 江里子

本校栄養士 日高 菜穂子

元本校管理栄養士 塩塚 宏治

8. 参加者 ①全学年生徒

1年	132名	②教職員・参加希望の保護者
2年	110名	
3年	115名	
新苑	4名	
合計	361名	

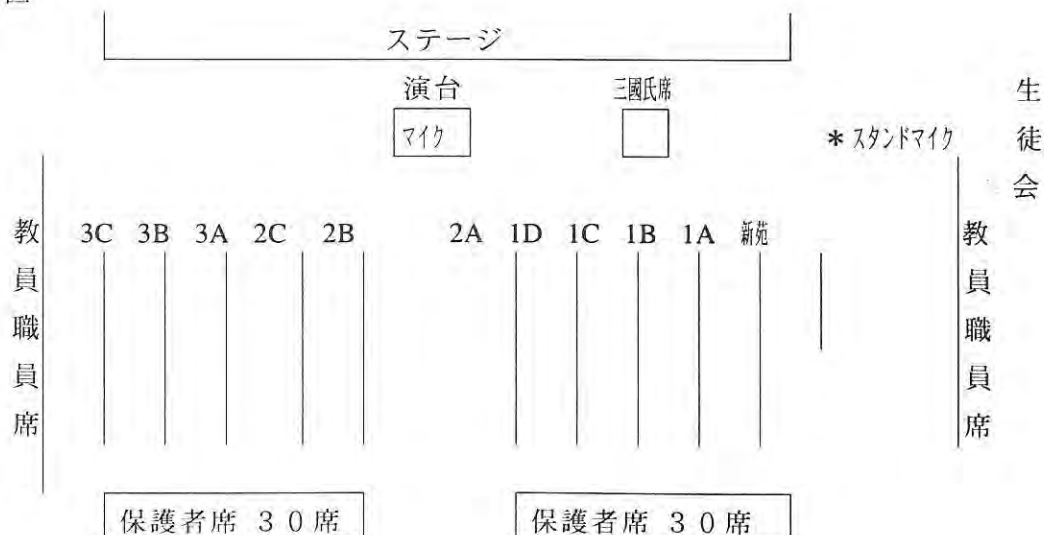
9. 時程

- 1 : 1 0 ～イスとプリント、筆記用具を持って体育館移動（体育館履きは、教室で履き替える）
 新苑→3年→2年→1年の順
- 1 : 3 0 ～三國氏のDVD鑑賞開始
- 1 : 5 5 三國氏体育館に入場 誘導 副校長
 ①始めの言葉 生徒会役員
 ②学校長挨拶→副校長に
 ③三國氏紹介 副校長
- 2 : 0 0 ～3 : 0 0 三國氏による講演
- 3 : 0 0 ①お礼の言葉 生徒会役員
 ②花束贈呈 生徒会役員
- 3 : 1 5 生徒退場 新苑→1年→2年→3年
- 3 : 2 0 ～各クラスでプリントのまとめ・学活

10. 分担

連 絡 山本副校長 伊藤 江里子
 司 会 生徒会役員
 三國氏紹介 山本副校長
 始めの言葉・お礼の言葉 生徒会役員（生徒会指導 伊藤 江里子）
 プリント作成（要点をまとめる・反省・感想） 伊藤 江里子
 接 待 日高・佐々木・笹子
 生徒整列 伊藤憲弘・伴場・森田
 ビデオ撮影・放送 小林・飯塚
 写真撮影 長崎・大野
 会場設営 3年生

11. 体育館配置

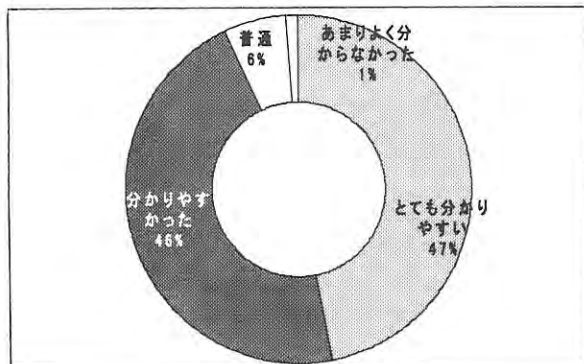


「食育」～食の大切さを三國シェフに伺う～のまとめ

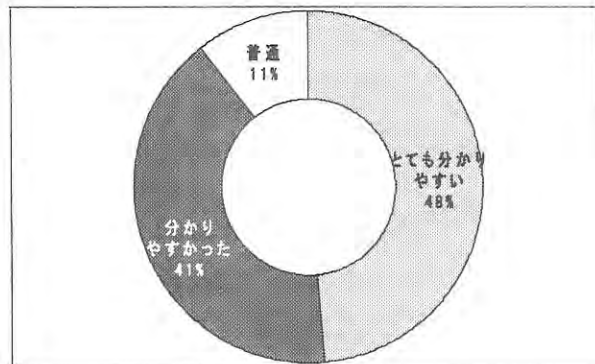
1. 自己評価より

①三國シェフのお話は、分かりやすかったですか？

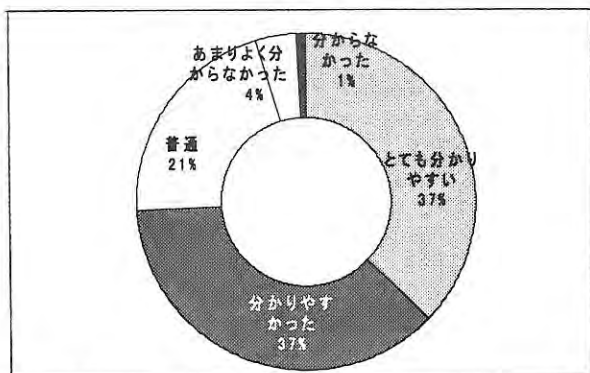
第3学年



第2学年



第1学年



三國氏



2. 感想・反省

①一番印象に残っているお話は？

1 学年

- 1位 スパゲッティの話
- 2位 ハンバーグのお話⇒黒いものは毒⇒洋食を目指す
- 3位 三國シェフの生き方
- 4位 よい人になるにはよいものを食べなさい
- 5位 苦みの大切さ ホヤの味
- 6位 僕はニシンの生まれ変わり
- 7位 五育⇒食が大切
- 8位 札幌のホテルでのお話⇒帝国ホテルでのお話（鍋を洗う）
- 9位 自分のことは自分しか助けられない 自分を信ずる
- 10位 一度や二度の挫折は当たり前⇒乗り越える努力を

2 学年

- 1位 札幌のホテルのお話⇒帝国ホテルでのお話（鍋を洗う）
- 2位 一度や二度の挫折は当たり前⇒乗り越える努力を
- 3位 よい人になるにはよいものを食べる

- 4位 三國シェフの生き方 働きながら夜間学校⇒シェフの道へ
- 5位 スパゲッティのお話
- 6位 苦みの大切さ ホヤの味 感性のお話
- 7位 増毛のお話
- 8位 自分は自分しか助けられない 自分を信じる
- 9位 働きながら
- 10位 スイスへ行かれたときのお話
(10年は帰らず修行?・自分に投資する・自分から挨拶する)

3 学年

- 1位 札幌のホテルのお話⇒帝国ホテルでのお話 (鍋を洗う)
- 2位 三國シェフの生き方 働きながら夜間学校⇒シェフの道へ
- 3位 自分は自分しか助けられない 自分を信じる
- 4位 一度や二度の挫折は当たり前⇒乗り越える努力を
- 5位 自分はニシンの生まれ変わり
- 6位 ハンバーグのお話⇒黒いものは毒
- 7位 良い人になるには良いものを食べる
- 8位 四味 五感
- 9位 キッズシェフ 味覚と味蕾等
- 10位 スイスへ行かれたときのお話 頑張ったから今がある

②お話を伺った感想

1 学年

- ・意外に面白い、かつ重要な話が聞けてよかった。
- ・「食」⇒生き方は結構つながっていると思った。
- ・三國シェフは、大変な経験をしていると思った。
- ・三國シェフは、暑い中「食育」についていろいろと話してくださりよかった。
- ・好き嫌いを無くして、よいものを何でも食べようと思った。
- ・自分のことを少しでも信じてみようかなと思った。
- ・「食」はとても大事だと改めて思った。
- ・苦いものが脳に刺激を与えると聞いてびっくりした。
- ・話がすごく分かりやすくてよかった。すごく大切なことを言っていたので実践したいです。
- ・三國シェフの人生では、努力ということがすごく感じられた。「食」がどんなに大切か改めて分かったので、いろいろなものに目を向けて頑張りたい。
- ・私は、とても嫌いなものが多いです。よく風邪を引くのは、食事からくるのかなぁと思いました。
- ・自分をよくするためには、まず自分を信じることから始めなくてはならない。これから少しずつ自分を信じていく。

2 学年

- ・DVDなども見て、勉強になった。
- ・とても分かり易く心に残った。
- ・貴重なお話が聞けて、よかった。勉強になった。

- ・「食」のお話は、ためになったし身にも付くと思った。
- ・僕も三國さんのように、自分の考えをしっかりとち、一つ一つの事に疑問や考えをもちながら生きていきたいです。
- ・甘い、酸っぱい、苦い、しょっぱいを食べて、健康になって感性を開きたいです。
- ・シェフのお話は、聞いていてとても面白かった。
- ・努力をすれば報われるとが分かった。
- ・自分のことは自分しか分からない、信じてやろうと思った。
- ・お話を聞けて良かったです。体をまず作ることの大切さが分かりました。
- ・料理の大切さがよく分かった。三國さんの店に行きたいと思った。

3 学年

- ・色々と勉強になるお話を聞かせてもらってよかった。
- ・小さい頃にもっといろいろな物を食べておけばよかったです。
- ・今までの食生活を見直すべきと反省。インスタント食品をなるべく食べないようにしようと思った。
- ・大切なことを感じ取るために「食」を見直すことが大切だ
- ・頑張っていれば認められたりするのだと思った。何事も頑張ることが大切だと思った。
- ・とても一筋に料理が好きな方だと思った。
- ・感性が大事なことを知った。
- ・食事が体だけでなく心とつながっていることを知った。自分でバランスのよいものを作れるようにしたいと思った。
- ・とても熱心にお話して下さった。「食」にこれからも敏感になればいい。



←全生徒と保護者、教職員の前で

三國氏



←三國氏の外国での活躍の様子を紹介したDVD

新苑学級〈さつま芋コミュニティ〉

1. さつま芋との出会い

新苑学級では、開校当初から、教室沿いの一角を畑として、花や野菜を育てる園芸作業を授業に取り入れていた。前身である四谷第二中学校の伝統を受け継いだものである。

3月から4月は、ほうれん草やさやえんどうの収穫、パンジー、チューリップ、フリージャーの世話を精を出す。この時期、特にパンジーのメンテナンスは大変である。卒業式や入学式では、このパンジーを会場に飾り、まさに「花を添える」のが習わしだからである。5月の連休明け、畑の整備に明け暮れる。球根の引き上げや、春野菜の後始末、草取り、土おこし、……と次期の準備である。夏野菜の苗植え、また、パンジーを育てるための土作りも必要である。そして、大変なのは、草取りである。取っても取っても伸びる草、夏草とのバトルは9月まで続く。夏休み中はパンジーの種まきをし、水やりに追われる。2学期から3学期にかけて、パンジーの移植を繰り返し(鉢を大きなものにしてゆく必要がある。)秋まきの野菜の種をまき、育てる。

以上のような年間サイクルであったが、行事も多く、また、国・数・英の学力を向上させてほしいとの保護者からの要望もあり、作業学習の時数が減っていった。そこで、作業の省力化が図れる作物はないものか、園芸作業の内容の見直しに迫られていた。そんな折、今から4年前のことである。本校のふれあいサポーターの一人、田畑さんより「先生、さつま芋、植えてみないかな？」とのお話があった。さつま芋は荒れ地でも育ち、たいした世話もいらず、秋には収穫できると聞く。渡りに船と、この話をお受けした。

2. さつま芋作り事始め

その年の新苑通信によれば、「田畑さん(さつま芋の大家でいらっしゃる)から芋の苗は横にねかせて土をやさしくかぶせて植えると教えていただき、みんなで植えました。」との記事が残っている(平成15年5月23日付)。

さて、さつま芋、水やりと草取りを多少するくらいで、ぐんぐん葉が茂り成長する。秋の収穫が楽しみであった。そして、秋、10月31日付新苑通信によると

＜芋堀り、焼き芋大会＞

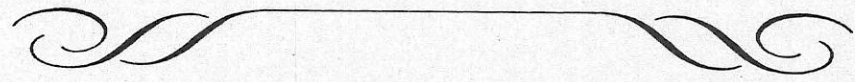
9時頃より、お芋大先生の田畑さんがお見えになり準備をして下さいました。他の青少年委員の先生方や校長先生、教頭先生、主事さん方も応援にきて下さり芋づるを綱引きのように引っ張りました。その後、土の中を宝(芋)探しです。ジャンボなお芋がゴロゴロ、みんな大喜びでした。焼き芋にふかし芋、おいしかった！この日の給食も偶然、芋ごはん。T君の名言「きょうは芋の一日」

3. さつま芋の輪

こうして、新苑畑では、芋作りが根付き、今日に至っている。この間、田畑さんはじめ地域のふれあいサポーターの皆さん、四谷警察の皆さん、また、その他の四谷地域に関連した皆さんへとお芋の輪が広がり、大人たちはさつま芋の研究？に精を出した。肥料のこと、根返しをまめにする、ビニールを被せること、そして、ついには、畑の土を入れ替えることまでやってしまった。

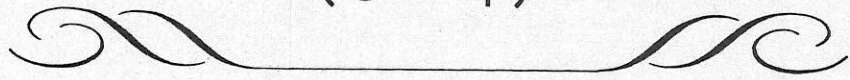
さつま芋がご縁のコミュニティーのお蔭で、毎年、都心で、芋ほり、焼き芋大ができるなんて、子供たちにとって、すばらしい体験学習であり、太ったさつま芋に舌鼓みを打ちつつ、心も太く逞しく成長しているようだ。大人にとっても、子どもたちの笑顔を最高のご馳走に、生きる力をもらっている。





VIII. 補充學習・探求學習研究部会

(3 年)



探求型学習時間の活用

1. 学力保証

本校の努力目標のひとつに、「オールB, オール3以上」という項目がある。すべての生徒がこの目標を達成できるように、生徒も教師も努力していこうとするものである。その目標を達成させるためのひとつの手段として、7校時を活用することになった。昨年度は「オールB, オール3以上」の目標に達していない生徒のみを対象として、補習授業を行ったが、今年はもう一步踏み込み、すべての三年生を対象として、さらなる学力の充実を図ろうと計画を変更した。この理由として、ある程度努力目標が達成できていることがあげられるが、通常の学習内容だけでは物足りないと感じ、さらに発展的学習に取りもようとする生徒たちがいたことが大きな要因であった。生徒の要望にも応えられる学校にしようというのが、この探求型学習時間の設定理由である。

2. 現三年生の学力の分析とその要因

では、現三年生の平均的学力はどの程度であろうか。これを考えるひとつの手段として、東京都教育委員会が昨年度1月に実施した「平成18年度 児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果を次に示す。

国語	国語	観点別結果				
	全体平均	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
都全体	69.5	90.8	78.1	70.8	64.3	65.3
四谷中	72.7	92.8	82.5	75.0	66.7	69.0
社会	社会	観点別結果				
	全体平均	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用・技能・表現	知識・理解	
都全体	70.5	91.5	62.7	73.9	66.5	
四谷中	73.6	94.4	65.0	76.1	70.8	
数学	数学	観点別結果				
	全体平均	関心・意欲・態度	見方・考え方	表現・処理	知識・理解	
都全体	70.2	93.5	49.9	74.2	65.9	
四谷中	77.1	97.8	57.5	82.9	71.2	

理科	理科	観点別結果			
	全体平均	関心・意欲 ・態度	科学的 思考	観察・実験 の 技能・表現	知識・理解
都全体	68.6	93.9	60.8	59.5	70.0
四谷中	69.0	95.0	61.7	61.9	67.9
英語	全体平均	関心・意欲 ・態度	表現の 能力	理解の 能力	知識 ・理解
都全体	78.2	78.7	69.9	76.5	82.7
四谷中	82.0	83.4	72.4	81.1	85.0

これは、二年次の1月に行われた試験の結果であるが、四谷中学校の過去の結果と照らし合わせても、全教科東京都の平均を上回り、良好な結果であった。そして、この結果が出せたのは、ここ数年間の取り組みの結果であるとも言える。

平成14年度・15年度の2年間、本校と四谷第六小学校は「文部科学省小中連携教育実践協力校」として研究を行い、その後は、四谷中と学区内の小学校4校に発展させて「算数・数学の小中連携教育」に取り組んできた。ここでは、数学を例として取り上げて述べる。

研究を通して行ったアンケートやテスト結果などにより、以下のような傾向があることが分かった。数学嫌いが上の学年に行くほど増えていること、小学校時代にできた分数の計算が中学校に入る頃には多くの生徒ができなくなっていること、多くの小学生が中学校の数学は難しいという不安を抱いていることなどである。それらを解決するため、有効な手段を研究し、今日まで様々な取り組みをしてきた。

例えば、分数のたし算では、小学校で履修した時点では、多くの生徒ができているが、中学校入学直後のテストでは、正答率が落ちている。その事実をふまえ、小学校では、卒業前の時期に小学校時代の復習をし、中学校では4月当初に学力試験を実施する。その結果分かった足りない部分は、授業の中でさらに復習を行う。これにより、生徒の不安は解消され、数学に取り組む心の準備ができた。また、小学校時代に中学校の教員に中学校の数学を学ぶことも、数学への不安という壁を取り除くうえで大きな役割を果たしてきた。

このような今までの実践研究をふまえ、中学校では、小中9年間の集約として相応しい3年間を考えねばならない。数学科では、一年次には、基礎・基本の定着を図り、二年次には、基礎・基本をもとに数学的な見方や考え方を育て、三年次には、さらに一歩踏み込んで探求していく力を身に付けさせたいと考えた。

では、その学力を身に付けさせるため、どう取り組んでいくのか。まず第一に、朝学習で基礎・基本の定着を目指した。毎朝5分の確認テストは、基礎学力の定着だけではなく、学ぶ姿勢や時間を有効活用する方法など、多くのことを生徒たちに学ばせることができた。

しかし、これだけでは表現・処理能力を多少高めることができるだけであり、数学への関心・意欲はこれだけでは身に付けることはできない。学習する上で最も大切なこの部分を高めるため、授業の展開を工夫した。授業力の向上は、非常に大切であり、常に大事にしていかなければならない部分である。生徒の関心意欲が高まることで、基礎・基本を学ぼうとする姿勢が生まれ、学力が定着する。さらにそこから生ま

れた意欲と、培った基礎学力が数学的な見方や考え方を生み出す。東京都の学力調査では、この「数学的な見方・考え方」という観点の平均正答率が最も低く、なんと50%を切っている。数学科教諭にとって大きな課題なのである。

では、この観点の向上を図るために何をしていくべきか。よく授業改善、授業力向上といわれるが、この授業力の向上も、方向性を間違えては意味がない。授業時間数や単位時間を変えるわけではないので、同じ時間の中で何を高めたいのかを教師は考えねばならない。数学では、「数学的な見方・考え方」を向上させる授業が一番重要であると考え。コンピュータや教具などの活用も行うが、問題の提示の仕方ひとつで、授業が大きく変わる場合もある。本校では、チームティーチングを実施しており、教員同士で助言し合い、授業改善ができたことは大変よいことであった。

しかし、週3時間の授業だけでは、できることにも限りがある。それ故、家庭学習が大切になってくるが、学校としても取り組めることを模索した。その一つが7校時の活用である。この研究には昨年度から取り組み始めたが、昨年度は2年生ということもあり、基礎・基本の定着にのみ活用していた。しかし、三年生になると学力差が拡大しつつあり、各人それぞれが自分に合った学習内容を期待するようになってきた。そのため、個の学力に応じた7校時の活用方法の研究が必要になってきたのである。

3. 7校時の活用方法と探求型学習

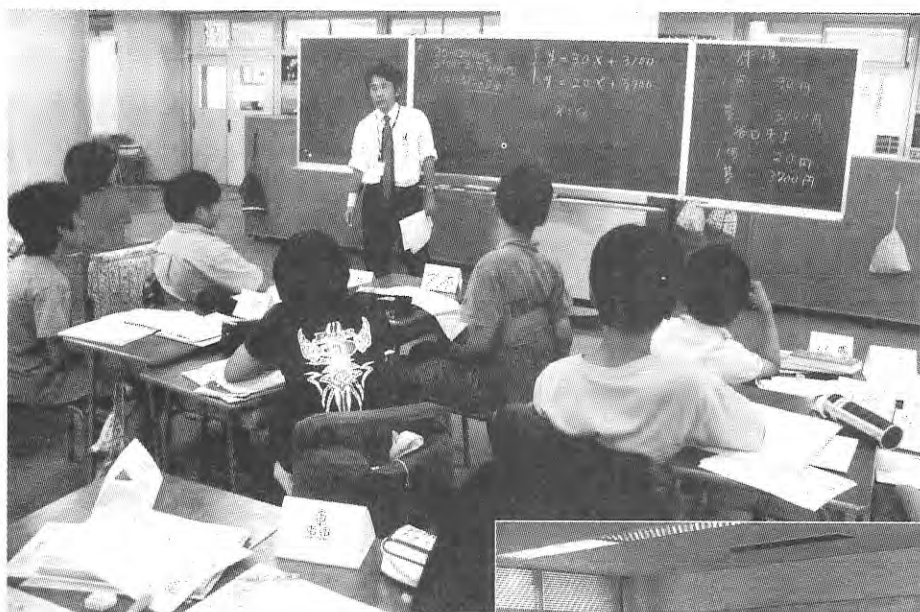
18年度の研究を受け、生徒の学力を高めるため、7校時に探求型学習を取り入れた学習を行おうという提案がされた。しかし、四谷中にとって初めてのことであり、いきなり取り入れても生徒たちは戸惑うであろうと考えられた。そこで、段階的に学習活動を高めるように工夫しようということになった。

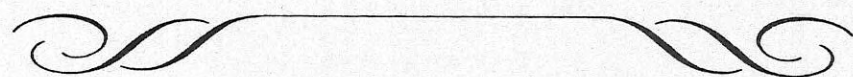
まず、一学期は曜日ごとに教科を決め、教科ごとに7校時(30分間)の学習計画を立てて進めた。数学は、毎週金曜日であったが、初めは基礎・基本の定着を目的とした。30分の前半に小テストを行い、後半は目標点に達しない生徒のみを対象にテスト問題の解説と復習を行った。一学期の中頃からは、全員に同一の問題用紙と解答を用意し、終わった生徒は自己採点および復習をするようにした。さらに、第三段階では、標準問題と発展問題、どちらから挑戦してもよい二種類の問題を用意した。この段階に至ると、トップクラスの生徒の目の色が変わってきた。発展問題の難易度が高いため、7校時が終了しても帰らずに友人と問題の解法について語り合っている生徒たちも見られるようになった。トップクラスの生徒ほど、数学を求めているという印象を受けた。

二学期からは、第四段階として、生徒を「基礎クラス・標準クラス・発展クラス・探求クラス」の4クラスに分け、各クラスごとに問題を用意し補充学習を行う予定であるとはいえ、数学の教師は学年に一人であり、問題用紙と解答用紙を4種類揃えることすら大変である。しかし、教師が一人で全クラスを指導するのは不可能であり、各生徒が自主的に活動できる問題用紙の作成が重要になってくる。それ故、教師の工夫が必要なのであるが、この工夫が後に生徒たちの探求活動の役に立つはずだと考えている。

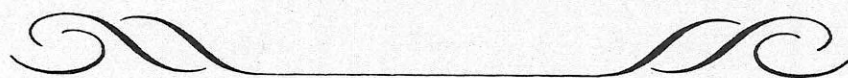
次に、第五段階が探求活動であるが、我々は生徒全員にこの活動をして欲しいと考えている。今まで培ってきたことから、生徒は自分に合った課題を見付け、その課題を克服するための学習を行う。この時期の生徒にとって、その課題の多くが自分の目標とする高校入試問題になる可能性が高いと思われる。基礎・基本に立ち戻る生徒もいるであろう。さらに、一歩進んで数学史や高校で学ぶ数学などに取り組む生徒がいる可能性もある。そしてこの段階に入れば、教師は指導者から助言者に替わり、生徒は学習を自らの探求活動として行うようになるのである。

以上、数学の取り組みについて述べてきた。数学は比較的结果が分かりやすく、短期的な比較がしやすいともいえるが、この取り組みの基本的考え方はどの教科であっても同じである。私たちは、この探求活動ができる生徒であれば、必ず自分の進路を切り開けると考えている。そしてまた、生徒たち全員にとって、学校がよき学びの場であって欲しいと願っている。





IX. 家庭・地域社会部会





1. はじめに

本校は、平成13年度に旧四谷第一中学校と四谷第二中学校が統合して四谷地区唯一の中学校として地域の方々の熱い想いを受けて開校しました。私は、旧四谷第一中学校でPTA役員をお受けしていた関係もあり、統合後も酒井スクールコーディネーターを中心にふれあいサポーター5人のメンバーの一人として学校に係わっています。

活動内容は、毎週1回昼休み時にふれあいルームで生徒の皆さんとの話し相手や学校教育活動の支援、地域への学校PR等が大きな柱となっています。

また、私は、四谷地区スポーツ交流推進委員会（以下スポーツ交流会という）の一員として、「誰でも気軽に参加できるスポーツクラブ」の運営にも参加しています。現在はスポーツ活動が中心ですが、将来は文化活動も含めた四谷により密着した生涯活動の場としての「総合型地域スポーツ・文化クラブ」創設に向かって四谷の仲間たちと活動を展開しています。

2. 学校の実情に接して

もう10年近く昔になりますが、初めて学校を内側からも観る機会がありました。その時に三つの驚きを感じました。①学校の先生は恒常的に多忙である、②校長の裁量余地は意外と少ない、③学校（先生）は地域の情報が乏しい、ことです。

幸い、校長の明確な経営方針の下で、各先生方の「生徒に一番よい教育を提供したい」との共通認識は揺るぎないものでした。苦しい時でも、「教育のプロですから」と、黙々と取り組む先生の姿に接するうちに、頑張っている学校の現状を地域に紹介し、また地域の声も学校にもっとフィードバックできないかという思いになりました。

3. 学校のよき理解者を増やす

PTAのネットワークを活用して、親父達と先生が出会う機会を増やす努力を重ねるうちに、気さくに接していただく先生の姿に親父達も打ち解け、今でも桜の時期に学校の枠を超えた数十名の仲間が集まり交流を深めています。

また、PTA顧問会や四谷地区青少年育成委員会等にも学校情報を正確に紹介したり、定期的な交流も行い、一人でも多くの方の目が四谷中学校に向くようスクールコーディネータ、PTAの方々と連携をとっています。

4. コミュニティ・スクール構想に接して

昨年度本校がコミュニティ・スクール推進事業調査研究校として文部科学省の指定を受けました。地域の様々の力を学校に取り入れながら、最善の教育の場を子どもたちに安定・継続的に提供できる更なるシステムづくりの取り組みがここ四谷地区で開始されました。

これまでの縦の「行政と学校」の関係から横の「学校と地域」の関係が重視される全く新しい仕組みとなります。それだけに地域の見識も問われますし、地域のコミュニティーが希薄になっていると言われている中、学校に積極的にかかわってくれるバランス・熱意のあるメンバーを集めなくてはならないなどの不安も一方では生まれました。

5. 各学校施設利用を介した新たなコミュニティ醸成中

四谷の子どもたちを対象に学校施設を利用している形態としては下表のとおり大きく三つに分かれています。昨年度からは、新宿区教育委員会の呼びかけで各団体での予算、事業内容のすり合わせを行っています。これにより各事業の悩みの共有化、ノウハウ交換、横断的な事業開催などが可能になり、各学校を介した横断的な新たなコミュニティの場が醸成される第一歩を踏み出しています。

そして次のステップとして、一般の学校施設利用者へも参加を呼びかけ、将来の「総合型地域スポーツ・文化クラブ」へとつながっていく構想となります。このような横のネットワークはコミュニティ・スクール構想の過程でも有意義な働きをしていくものと期待できます。スポーツ交流会としては各団体間のネットワーク形成と活性化へのお手伝いもできればと思います。

学校に係わる3事業

	活動主体	主な活動内容（対象）
①居場所	スクールコーディネーター	放課後の子どもの居場所（子ども）
②校庭開放	PTA	休日の校庭開放（子ども、保護者）
③交流会	スポーツ交流会	学校を巡回したスポーツの場の提供（誰でも）

6. 子どものために意欲的に動き出した地域の団体

ここ数年、四谷地区青少年委員会がPTA、地域、行政の方々と子どもたちの安全確保の観点から「ピーポ110ばんのいえ点検」に取り組んでいます。今年は更に一歩進め、子ども実行委員会による「あいさつ運動（知っている人を増やそう）」キャンペーンや四谷地区協議会や町会との連携による「四谷子ども見守り隊」発足など意欲的な取り組みを開始しています。こうした子どもたちのための地域の運動が盛り上がってくることは、学校に地域の求心力が集まるよい機会となります。

7. 都市型コミュニティ構築はネットワークのつなぎ直しから

これまで学校と地域との関係は単発的な行事とか個人での関係に留まっていますが、これからは学校を介して町会をはじめ各団体などが横断的につながるネットワークを構築していく必要があります。

まず、日ごろより学校と身近に接している3事業の団体は、従来の「単なる知り合い」から「知り合いの知り合いは知り合い」と更に学校の外側へも含めたネットワークづくりを積極的に開始する必要がありますし、学校の先生方ももっと四谷の町へ出かけ、地域を知る必要があると思います。

そして、今回、四谷地区青少年育成委員会が提唱し、子どもたちのために町会をはじめ地元の関係団体、行政をも横断的に巻き込む運動に着手したことは大都市の真ん中にありながらも古き伝統を大切に守る四谷のコミュニティ活性化にとって明るい展望となります。

本校での研究発表が、地域として学校に対して何を期待するのか、何ができるのかとのコミュニケーションを大切にして、相互の更に安定した信頼関係を築き上げていく第一歩となり、都市型コミュニティ構築に向けての四谷中学校の在り方の礎になると大いに期待しています。

四谷中学校スクールコーディネーター 酒井ふさ子



1. 四谷学「総合的な学習」・教科の地域人材活用

平成16年より四谷中学校の担当となり、総合的な学習を教科との連動を考えていくという見直しの時期でもあり、総合的な学習の時間を「四谷学」として1学年から3学年までを見通した全体計画が出来上がるまでの期間、学校を知るという時間に充てられました。この間中学校の総合的な学習の時間の必要性、生徒自身の課題の的確さなどの疑問点も考えていました。詳細な授業計画ができ、地域人材活用の時期的な見通しもたてられることは、ゆとりをもって今後の地域教育資源のネットワークづくりが可能となりました。

(1) 四谷学

① 1学年「四谷学」

「四谷を語る」という主題で講師依頼を受けました。授業後に先生から幅広い観点からのお話をしていただいたので、生徒が各自課題を見付けることができました。との報告を受け、授業者からは大変貴重な体験をさせていただきました。との感想をいただきました。

② 2学年「四谷学」と教科の連動 / 地域、保護者の参加・体験授業

四谷学と教科の連動を考えていきたい、積極的に地域人材活用を実践していきたいとの考えを受け、地域人材、専門的知識をもった保護者の人材の紹介を行ってきました。2年生では先生自身からの人材活用の授業も数多くありました。飾り寿司の体験、三国シェフの講演など保護者、地域の方も一緒に体験できたことは、参加者同士のコミュニティも広がることができ、学校への関わりをもてたことに大変喜んでいました。私も刀鍛冶の方、鎌倉の歴史、時代衣装の体験、時代食の授業を参観し、多くのことを学ぶことができました。今後も授業内容によっては、地域、保護者の方の学びの場として提供することの可能性を感じています。

③ 3学年「四谷学」

「生きがい」というテーマでの講師4名の依頼があり、授業のねらいは、講演を聞くことにより自己の将来を考えるという、四谷学のまとめとしての重みを感じる依頼でした。講師の選定ではできるだけ、夢と希望をもてる経験豊かな人材の紹介を考えました。四谷に四代続く建築士、甲子園を経験した巨人軍のコーチ、世界で活躍する音楽家、元新聞記者の方々に講師をお願いしました。この授業では授業計画、授業のねらいが明確であり、事前授業に基づいて、当日は講演～質疑応答～生徒との体験という授業形態で行われました。講師の方々からも事前学習の教材準備、資料の持参、パワーポイントでの授業の要望等があり、先生方も忙しい中機材の準備も快くしてくださいました。学年のチームワーク力を強く感じました。授業の工夫によって、講師のよさを引き出していただいたことは大変にありがたく思いました。

(2) 教科 — 3学年「音楽研究授業」—

音楽家4名の依頼があり、二期会にも所属するレベルの高い講師を紹介できました。教科の人材活用には課題を感じていましたので、打ち合わせから分科会にも同席させてもらい、どのような授業を展開するのか大変興味深くもありました。45分という授業時間の中で、生徒の成果が目に見えた事は大変に驚きでした。授業のプロである先生と音楽家というプロとの協働で生徒を共有し、生徒に何ができるかを教えていただけた授業で、今後の教科への人材活用の参考になりました。全身汗だくで指導していただいた音楽家の方々の思いは生徒にも伝わり、秋の合唱コンクールに向けて、生徒自身の工夫されるであろう事は推測できました。

2. 子どもの居場所づくり事業から地域スポーツ・文化クラブ事業へ

平成16年度からの3年間、学校を活用した子どもの居場所づくり事業はスクールコーディネーターが核となり、地域の方、PTAの協力を得て運営してきました。子どもたちの現状と課題を把握し、実施日については放課後、スポーツについては元オリンピック選手、元全日本選手クラスのレベルの高い指導者を招いての事業を実施してきました。文部科学省の予算措置終了と新宿区の地域スポーツ・文化クラブへの事業展開を考え、安定した事業内容が継続できることを考慮し、昨年度より弦楽教室、ロボット工作教室、陶芸教室、茶道教室を実施しています。中学生向けの企画は難しいところもありましたが、校長、先生方のアドバイスと協力を得て安定した事業となり定着をしています。学校の協力は多大であり、音楽室、美術室、図書室、技術室、理科室の施設開放と成果の発表を合唱コンクール、学習発表会での展示という機会を提供していただけたことは、中学生向けの事業としてなりたった要因でもあります。

多様なプログラムと多様な人々とののかかわりの体験は生徒にとって貴重な体験となっています。今後の事業展開についてはスポーツ、文化のプログラムの充実を図ることができれば、大きな可能性をもった事業となることができると思います。

3. 地域育成団体との連携・協力

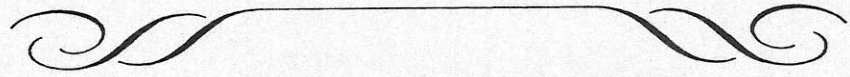
四谷地区には四谷青少年管弦楽団という地域で運営する、小学生から高校生までを中心としたオーケストラがあります。設立の背景には学校完全5日制を迎えるための準備と当時の四谷第一中学校には音楽関係の部活がなかった事があります。何より運営面での難しさは安定できる練習会場としての活動拠点の確保にあります。平成19年度より四谷中学校での活動を校長と音楽科の先生に打診したところ、快く学校を開放していただく了解をいただきました。運営には私も携わり、多くの地域の方々の協力をいただいています。子どもの学び、育ちを確かなものにするためには、教育者としてのプロである先生の協力なしでは成り立ちません。地域の教育力の向上を明確なものにしていくためには、成果をどのように設定していくかが重要であると考えています。自立した運営能力を探っているところです。音楽科の伊藤先生には音楽監督として指導をいただいています。子どもたちをどのように育てていくかの実践例を明示してくださることは、地域の楽団として運営スタッフの質の向上へつながっています。

4. コミュニティ・スクールにむけて

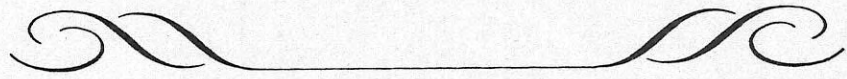
学校を職員室の内側から見られるという、新宿区のスクールコーディネーター制度は開かれた学校づくりを推進することのできる、画期的な制度であると思います。活動場面によっては、学校、地域の中立的な立場をもつことの必要性を感じました。コミュニティ・スクール推進事業の調査研究校としての期間、学校が動く、職員室が活気付くという空気を実感しました。四谷学の充実したカリキュラムは進路保証につながると思います。私にとっても学びの場でもあり貴重な多くの体験をしました。授業の研究は確かな学力への定着を図ることができると思います。学校・保護者・地域を融合したコミュニティの活動事例にもありますように、学校が教育力、施設の提供をすることによりコミュニティの拠点としての機能を十分に果たすことのできるものと確信しました。

学校運営協議会が安定した学校運営をする上では重要な役割を担うことになります。学校・地域・中立的な立場の三者が集うことによって、よりスムーズな運営がなされると思います。

未来を担う子どもたちへ学校と地域が協働して、役割と責任をもち、コミュニティ・スクール＝(仮)地域協働学校として、四谷中学校が新しい学校、信頼される学校になることを願っています。



X. 研究の成果と課題



研究の成果と今後の課題

1. 研究の経緯

本研究は、研究主題を「都市型コミュニティ構築に向けての学校の在り方」、サブテーマを「新宿区が推進する都市型コミュニティの構築に向けて」として、平成18・19年度の2年間にわたり、文部科学省のコミュニティ・スクール調査研究校を受けて推進してきたものである。教育課程改善の目標を「確かな学力の獲得」に置き、各教科の授業研究、コミュニティ・スクールを指向した組織づくり、各教科の展開等、具体的な学校改善の取り組みを進めてきた。

本校は、これまでも地域の関連小学校との小中連携授業の組織的な取り組みの実践や、地域の方々に参加していただく総合的な学習の展開などを実施してきおり、これらの取り組みは、現在に至るまで地域の方々のご協力のもとに継続している。

これらをふまえ、18年度は、研究初年度として学校の果たすべき役割と可能性を探ることを主眼に、地域に開かれた学校を目指し、指導計画・評価計画の改定、地域人材の活用、「四谷学」の実践、地域活動への参加等を通して基礎学力の定着と個性を生かす教育の充実に力を注いだ。また、学校運営協議会の設置は、コミュニティ・スクールの意義の確認と研究推進の方向等の議論がなされ、調査研究を進める上でも、授業改善・学力向上を検証するという面においても重要な役割を果たした。

今年度は、引き続き授業研究を一層深めるとともに、生徒の活動に主眼をおいた様々な工夫に取り組み、生徒の目から見、感じ取る授業の展開といった具体的な学校改善の努力を続けてきた。さらに、コミュニティ・スクールを「(仮)地域協働学校」として位置付け、家庭や地域社会との融合による教育、補充と探求学習、幼保・小・中一貫した教育等の体制づくりも併せ、推進している。

2. 研究の成果と課題

(1) 授業研究による試み

「確かな学力の獲得」に向け、各教科における専門性の高い講師の先生方を招聘し、実践的な研究授業に取り組んできた。現時点で合計7教科におよぶ研究授業を実施している。教科毎に研修会を開催し、次の2点について9人の講師の先生からレクチャーを受け、内容を深めることができた。

ア、地域のコミュニティと係わる人材活用の可能性

イ、コミュニティ・スクールとしての教科指導の視点

どの研究授業でも、授業後、全教員とスクールコーディネーターや授業補助者が参加したディスカッション（聴衆参加型討論）を行い、授業改善について活発な意見交換を行った。その後、この討論を受ける形で講師から専門的指導を受けた。この研究協議会における大きな効果は、学習者である教員から発せられた質問を中心に、講師の先生方とともに積極的な授業改善の糸口が模索されたことにある。この形式は我々教師の意識を目覚めさせるに効果的であった。生徒の学習意欲を喚起し、生徒の自主性と自らが発する内的な動機付けを重んじた授業の構築の向け、この2年間の取り組みは、大きな成果を残せたと考える。

（２）授業への地域の人材活用及び地域の教材化

本研究では、教育の到達目標を「学力保証」と「進路保証」に置き、将来的にも四谷の町を支え守る、郷土への帰属意識をもった「四谷区民」を育成することを大きなねらいとしている。このねらいを達成するため、教職員の授業改善と平行して、地域の教育力の活用を推進してきた。平成１８年度は、５名の地域の方々に講師として授業に入っていただき、理科、数学、社会、国語の４教科で、四谷地域のコミュニティーを視野に入れた授業研究を行った。また、平成１９年度では教育内容の技能面をさらにレベルアップするための取り組みを中心に、コミュニティー・スクールを指向した授業の実践として、地域の方々の教育力を取り入れ、多様な授業を展開した。

地域の教材化の特徴は、地域社会の大人や保護者など、全てが指導者となりうるということである。地域のもつ教育力を結集し、計画的に進めるための研究をこの２年間進めてきたが、この取り組みは、新宿区の特徴的システムであるスクールコーディネーターの酒井ふさ子さんに負うところ大である。スクールコーディネーターを活用した学校教育の充実、学校長の教育重点方針の要である

○四谷学における地域の人材活用

本校では生徒一人一人の生きる力を育み実践力を培うために、総合的な学習の時間を「四谷学」と称し、時間割に組み込んだ活動と一定時期にまとめ取りの時間を含めて年間７８時間程度実施してきた。ガイダンスの機能を生かした指導、自己啓発的体験学習、課題探究型授業等の実践を通して、地域の方々の人材活用、地域そのものの教材化など地域への生徒たちの思考、興味のますますの広がりが今後期待される。これらの取り組みにより、生徒の意欲・関心が高まるとともに、学校に授業に來られた方々は、自分の地域に所属する中学生の実際の姿に触れ、中学生に対して、新しい印象をもって帰られ、本校の生徒の姿を地域に伝えてくださるという結果も生まれた。生徒たちが地域へ関心を抱き、意識的に地域に関わる活動に参加することができるシステムづくりを今後も心がけたい。

（３）今後の課題

（仮）地域協働学校の最後ゴールは、四谷の町づくりの中に学校教育を組み入れ、教師・保護者・地域の方々が一体となって活動する基地を形成することにある。そのためには、学校を生涯学習の拠点とし、地域住民が気軽に学校を利用する雰囲気づくりが重要となる。また、併せて地域総合型スポーツ文化クラブの立ち上げを図っていくことも、（仮）地域協働学校の重要な視点となる。その他、学校が取り組むべき課題としては、学校評価の活用、学校運営協議会のあり方、地域の各組織との連携（ネットワークづくり）、学校運営協議会での委員の方々のご意見をもとに更なる授業力向上、そしてスクールコーディネーターによる学校デザインなどが改善の余地として残されている。

最後になりましたが、文部科学省はじめ新宿区教育委員会の方々へ御礼申し上げますとともに、研究授業に対して懇切丁寧な、ご指導、ご助言を賜りました各教科の講師の先生方および四谷地域の皆様、研究の指針と方向性をいただいた数多くの皆様に心から感謝申し上げます、研修委員長のご挨拶とさせていただきます。

まだまだ、力不足のところはありますが、残り６か月をさらに生徒の学力向上に向け、教師、生徒一丸となって努力しなければなりません。地域の方々とのさらなる密接な結びつきを念頭においた取り組みによる飛躍と学校改善に向け、努力邁進していく所存であります。地域コミュニティーの方々の今後のご支援、ご助言をお願い申し上げます。

あ と が き

副校長 山本 宣子

本校は歴史ある四谷第一中学校と四谷第二中学校の統合によって生まれ、四谷地区ただ一つの中学校となりました。両校とも地域の方から愛され、誇りとされてきた学校であり、今も卒業された方が大勢訪れ、懐かしむだけでなく本校の未来に期待を寄せ、子どもたちを温かく見守ってくださっています。学校と子どもたちに特別の思いを寄せてくださるこの地域あってこそ、この研究は成り立ちました。また、かつて8校あった四谷地区の小中学校は統合を経て現在は1中学校3小学校の4校となりましたが、地道に重ねてきた連携の実績をふまえ、今も教育課程の連続性と子どもの学力向上を目指す様々な取り組みが続いています。とはいえ、「都市型コミュニティ構築に向けての学校の在り方」という主題は大きく、学校がコミュニティ構築にどのように関わっていくのか、答えを2年間で出すのは難しいことです。しかし、本校の成り立ちと歩み、地域との関わりの経緯を紐解けば、地域の願いや将来への希望が、学校の願いである学校の教育目標と縄をなうように重なり合い、寄り添っていることがわかります。本紀要は、「(仮)地域協働学校」を目指す本校の研究の歩みの記録であると同時に、新宿という日本有数の都市に位置する四谷地域が、地域の未来を担う中学校の生徒の育成にどのようにかわり、成果を上げてきたかの記録でもあります。

今日の社会では、都市化につれて匿名性が強まり、人と人との関わりが希薄になってきました。子どもを育む上で、地域の絆の大切さは認めつつも、子どもを囲む人間関係は限定されているのが実情です。本校のように歴史や伝統に恵まれている地域でも核家族が増え、コミュニケーションのツールとして携帯電話やメールのように、当人同士以外の人を介さない方法が一般化してきました。学校生活の中で人とのかわりが苦手と感じる生徒もいます。こうした現状への対策として、有効な試みとしてコミュニティ・スクールが全国的に広がっているのもうなずけることです。

本校は、「地域との協働」を、地域・家庭・学校が生徒を共有しつつ、役割と責任をどのように果たすかという観点で捉えてきました。さらに二年目には、中村祐治先生に「分担する協働」、「共通する協働」という視点をご教示いただきました。地域・家庭・学校の各々が、それぞれでなければできないことを推し進め、一方で三者が共通して取り組むことによって教育効果が高められることを立証していくという考え方です。本研究では、学校の役割として学力向上を掲げ、教育課程の工夫、授業改善、指導と評価の一体化、校内の評価基準の精査等に取り組んできました。

「全員がオールB・オール3以上の成績を収める」ことを指導の目標とし、学習のねらい・目標の達成を的確に把握するとともに、校内の評価基準を明確にし、生徒が自分自身で目標の設定・評価ができるようにしました。また、地域と共通する協働の事例として、総合的な学習の時間を軸に、必修・選択教科と特別活動を関連づけた「四谷学」を組み立てました。また、今年度は「(仮)地域協働学校」の実現に向けて、上記の考え方に基づく四つの部会を設け、実践と検証の研究を行いました。今回の発表は、この実践をふまえ、「四谷型地域協働学校」の方向性を提案するものです。みなさまの御意見、御指導をいただくことができれば幸甚この上ありません。

この研究を進めるにあたり、東京都教育委員会、新宿区教育委員会には多くの御指導をいただきました。厚くお礼申し上げます。また、平成18・19年度の2年間、学校運営協議会委員長金井肇様を始め、委員の皆様には、コミュニティ・スクールの基本的な考え方から、日々の授業の検証にいたるまで、多大なお力をいただきました。さらに、1年半にわたる研究授業に助言をいただいた講師の先生方、多くの授業に携わっていただいた地域の皆様、その全てに関わりながら地域と学校を結び、コーディネートを通して地域協働を実りあるものへと進めてくださっている酒井ふさ子スクールコーディネーターに感謝申し上げます。

私たちは、この研究によって、生徒一人一人に充実した学びと学校生活を約束し、生徒・保護者・地域の皆様に学校の役割と責任を果たす事ができると確信しております。これからも一層のご指導を賜りますなら幸いです。

学校運営協議会委員

委員長 金 井 肇

委員 大熊 勝 高橋 英明 小川 貴裕 酒井 ふさ子
 伊藤 治雄（18年度） 廣瀬 由美子（18年度）
 木村 信美 千代 徳子 小倉 利文 坂本 恵子
 杉原 純（18年度） 菅 波 健

本研究に携わった教職員

〈平成18年度〉

谷 合 明 雄 酒 井 ふさ子（スクールコーディネーター）
 大 友 照 典 飯 塚 光 司 伊 藤 憲 弘 伊 藤 江里子 井 上 恵津子
 榎 本 江美子 粕 谷 紀 之 木 村 和 子 近 藤 正 子 井 須 田 満
 高 山 和 美 武 田 玲 子 中 川 昭 司 長 崎 秀 一 能 勢 良 弘
 初 瀬 美都子 伴 場 敏 彦 中 峯 尾 智 子 森 田 基 嗣 和 田 弘 文
 氷 飽 佳 子 塩 塚 宏 治 堀 越 健 一 西 島 泰 子 笹 子 一 夫
 佐々木 伴 子 田 中 徹 伊 沢 英 知 富 田 信 乃 小 林 英 子
 （スクールカウンセラー）

〈平成19年度〉

山 本 宣 子 大 川 日出男 大 野 浩 史 岡 村 嘉 久 小 林 伸 一
 松 友 聖 子 柳ヶ瀬 栄三郎 田 中 真 理 澤 石 友 紀 辻 愛
 日 高 菜穂子

発 行 日 平成19年9月
 発行・編集 新宿区立四谷中学校
 東京都新宿区四谷1-12
 TEL 03(3358)3771
 FAX 03(3358)3770
 e-mail iyotsuya@educet.plala.or.jp
 印 刷 所 月明印刷

